自得慧暉の活動とその禅風（下）

――曹洞宗宏智派の源流として――

佐藤秀孝

宏智禅の後継者

北宋末期から南宋初期にかけて中国の曹洞宗は臨済宗諸派に互してかなりの隆盛を呈しており、そんな中で自得慧暉も天童山の宏智正覚の高弟として浙江（とくに明州と杭州）の禅林を中心に活動し、晩年は宏智禅の正統的後継者として一応の評価を受けていたといってよい。慧暉の評価が他の宏智門下の禅者に比して高いのは、もちろん、慧暉の門流が、

自得慧暉―明極慧祚―東谷妙光―直翁可挙―雲外雲岫―無印大証―天章景雲

と次第して元末明初まで維持され、また鎌倉末・南北朝期に日本禅林にも導入されている点が大きいであろう。しかしながら、慧暉の禅風そのものにもやはり曹洞禅者としての独自の位置付けがなされるのであって、そのことを通して慧暉の評価もまた定まるものといえる。

すでに慧暉がなした活動については、その行実を追って詳しい消息を窺ったわけであるが、つぎに正覚の黙照の禅旨を継承しているはずの慧暉の禅風または禅思想について、いくつかの面から若干の考察を試みておくことにしたい。

慧暉に関しては語録として『霊竺浄慈自得禅師録』六巻が存し、宏智派の貴重な資料ともなっているわけであるが、この語録自体がすでに秘録というに相応しい特異なものであり、幾分かは他の資料とも重複する慧暉の語句を収めてはいるものの、その大半は真に慧暉の語ったものか否かが断定できず、後代に慧暉に仮託して捏造・編纂された禅籍ではなかったかとすら推測される面がある。このため、慧暉の禅風を直接に窺う上では『霊竺浄慈自得禅師録』はかなりの問題を含んだ語録ということになり、ここでは必要な個所を除いて考察の対象から外しておく方が無難といえよう。(1)

そこで以下、中国の禅宗関係の諸文献に収録される慧暉の

上堂・示衆・法語その他を可能な限り収拾し、これをいくつかの面から分析・整理することによって、その禅風のあらましを窺ってみることにしたい。

坐禅の重視

すでに行実を通して眺めたように、慧暉はその生涯にわたり坐禅辦道を重んじた禅者であったらしい。いま、重複する面もあるが、こうした面について再び取り上げておくことにしたい。

『叢林盛事』巻上「自得暉和尚」には、慧暉が長蘆寺の祖照道和の席下に在った折り、北宋末期の不安な世相の中で群盗が蜂発して長蘆一山を横行する事件が起きている。そんなきわめて切迫した状況下にありながらも、慧暉は僧堂で坐禅の行を捨てることがなかったとされ、稀有なる消息を伝えている。この時の慧暉の決意の語として、

> 参禅は本より生死に敵せんが為なり、豈に此の難に因りて便ち逃避すべけんや。況や我が色見は又た弱若なり、中路に至れば、則ち彼の手に落ちん。

と述べているのは、若き慧暉の仏道修行・参禅学道に対する厳しい姿勢を語るものとして注目される。生死の一大事を了畢せんがために禅門に投じたのであるから、たとえ修行中途で生き絶えても本望であるというのであり、盗賊に箭を射られる極限状態でも坐禅を決して緩めなかったわけである。

また慧暉の伝記史料が等しく伝える天童山の宏智正覚の席下で開悟する機縁となった消息も、僧堂での夜坐に因むものであって、夜坐の禅定の折りに聖僧文殊の前で焼香した慧暉が、堂内を巡堂する正覚の荘厳な行仏威儀の中に悟りのありようを垣間見たことが記されている。さらに「瑞巌石牕禅師塔銘」によれば、天童山にて法弟の石窓法恭を魅了したのも只管に危坐する慧暉の坐相にほかならず、このため法恭は慧暉に兄事してともに坐禅に邁進したとされている。

いずれも只管打坐をその基調としていたといってよく、慧暉が坐禅の実参を如何に重視していたかが知られよう。おそらく慧暉は生涯にわたり坐禅を日々に行じ、門下の学人にもこれを課したはずである。当時、曹洞下の黙照禅者ほど坐禅に価値を見い出し、これを重視した宗団も稀である。その典型的な面影を慧暉や嗣宗さらに法恭らの行履に窺うことができよう。(2)

慧暉の法孫でその禅を継承している南宋末期の短蓬遠（？―一二四七）が昼夜に枯坐する徹底した打坐を重んじ、ために諸方より遠鉄橛という雅号を得たとされるのも、そうした慧暉の気風を受け継ぐものであろう。(3) こうした面はやはり若くして直接に慧暉に学んだと目される真歇派の長翁如浄（一一六二―一二二七）などにも濃厚に窺うことができる。(4)

曹洞宗旨の挙揚

また慧暉には曹洞の流れを酌む禅者として曹洞宗旨を挙揚せんとする面も顕著である。すなわち、南宋初中期の大慧派の晦巌智昭の『人天眼目』巻三「曹洞宗」の項や、明末清初の曹洞宗の永覚元賢（一五七八―一六五七）の『洞上古轍』巻上（『永覚和尚広録』巻二七に所収）の項によれば、慧暉に関するものとして「五位頌〈自得暉〉」「門風偈〈自得暉〉」「自得暉五転位」が載せられている。

すなわち、慧暉が曹洞の「偏正五位」に関して述べた「五位頌」とは、

自得暉

正中偏。混沌初分半夜前、転側木人驚夢破、雪蘆満レ眼不レ成レ眠。

偏中正。宝月団団金殿冷、当レ明不レ犯暗抽レ身、回レ眸影転二西山頂一。

正中来。帝命傍分展二化才一、杲日初升沙界静、霊然曽不レ帯二纎埃一。

兼中至。長安大道長遊戯、処処無レ私空合レ空、法法同レ帰水帰レ水。

兼中到。白雲断処家山好、撲二砕驪龍明月珠一、崑崙入レ海無二消耗一。

というものであり、この頌は『霊竺浄慈自得禅師録』巻三「上堂」にも載せられている。(5) 正偏五位とはいうまでもなく平等の正位と実相の偏位の関わりを通して証悟のありようや仏法の大意を示した曹洞系の機関である。ただ、慧暉の「五位頌」では第四位が「偏中至」ではなく「兼中至」になっており、これはおそらく『人天眼目』や『洞上古轍』が改めたものというより、師の宏智正覚が『宏智禅師語録』「明州天童山覚和尚偈頌箴銘」でやはり「兼中至」を用いているのを受けているといえよう。(6)

大陽警玄によって北宋代の曹洞宗旨が確立されて以降、曹洞禅者は好んで偏正五位を唱導し、自らの五位頌を作成しているが、そんな風潮の中に慧暉も存したわけである。また『洞上古轍』巻上「五位答問」には、正偏五位に関する問答として慧暉のものも収めているが、これは後に示す上堂(9)のものである。(7)

また『人天眼目』巻三と『洞上古轍』巻上には「門風偈〈芙蓉楷・自得暉・古徳〉」として曹洞の門風を示す慧暉の偈頌が法灯の祖である芙蓉道楷の偈頌などとともに載せられている。(8) いま、慧暉の偈頌の部分のみを列記してみよう。

妙唱不レ干レ舌

如如寂滅似二無情一、一句従来本現成、舌運二広長一元不レ間、雪峯相見望州亭。

死蛇驚出レ草

金鞭遥指玉堂寒、驚起将軍夜出関、三尺鏌鋣清二四海一、攙旗一掃絶二癡頑一。

解レ針枯骨吟

宮漏沈沈夜色深、灯残火尽絶二知音一、木人位転玉縄暁、石女夢回霜満レ襟。

銕鋸舞二三臺一

銕牛無レ角臥二山坡一、鞭起如レ飛見也麼、閙市横騎人不レ会、擡レ眸鷂子過二新羅一。

これは道楷が示した「妙唱不レ干レ舌、死蛇驚出レ草、解レ針枯骨吟、銕鋸舞二三臺一」という四転語に対する慧暉の偈頌であり、やはり『霊竺浄慈自得禅師録』巻三「上堂」にも「四偈」として載せられている。(9)

『人天眼目』巻三には「五転位〈古徳立題、自得暉頌〉」として、『洞上古轍』巻上には「自得暉五転位」として、

匣内青蛇吼

宝剣横斜天未レ暁、洗二清魔仏一逼レ人寒、匣中隠隠生レ光処、衲子徒将二正眼一看。

金針去復来

清虚大道長安路、往復何曾有二間然一、暗去明来鋒不レ露、渠儂初不レ堕二中辺一。

秦宮照レ胆寒

巌房閒寂冷如レ氷、妙得二真符一処処霊、転側無レ依功就レ位、回レ頭失却楚王城。

午天銀燭輝

午天皎皎玉輪孤、一点光明分鑑レ湖、閑歩却来遊二幻海一、十方沙界大毘盧。

深巌蔵二白額一

白額深蔵烟霧昏、異中来也自驚レ群、草深直下無二尋処一、触著軽軽禍到レ門。

という五偈頌も載せられている。これは曹洞の宗旨に関して慧暉が古徳(未詳)の立題に対して自らの提唱偈頌を示したものであり、同じく『霊竺浄慈自得禅師録』巻三「上堂」においても「宏智和尚五転位」に対する五偈として載せられているから、(10)ここでは古徳とは師の正覚のことを指していることになろう。(11)

もちろん、『人天眼目』や『洞上古轍』は、ともに曹洞宗旨を強く薫らせるもののみを載せているわけであるから、ことさら慧暉をこの面のみで押さえることは的確でないかも知れないが、ともかく慧暉に法統の祖師の禅旨である曹洞宗旨を挙揚する面がかなり濃厚であったことは否定できない。

叢林の規矩の重視

東呉沙門浄善が重集した『禅林宝訓』巻四には慧暉の書簡三篇を載せているが、(12)そこには禅林の時世の弊風に対する鋭い批判と戒律重視の立場が窺われる。すなわち、その最初の

書簡とは、

自得輝和尚曰、大凡衲子、誠而向レ正、雖レ愚亦可レ用。佞而懐レ邪、雖レ智終為レ害。大率林下人、操心不レ正、雖レ有二才能一、而終不レ可レ立矣。〈見二簡堂一書〉

という簡略なものであり、慧暉が楊岐派の此庵景元（一〇九四―一一四六）の法嗣である簡堂行機（一一一三―一一八〇）と互いに相見した際の書である。行機は彼の圜悟克勤（一〇六三―一一三五）の法孫に当たる人であり、[13] 慧暉はその書の中で真の衲子とは智とか愚に関わらず、操心の正しい人でなければならないことを強調している。

また、つぎに載せられている書簡は、

自得曰、大智禅師、特剏二清規一、扶二救末法比丘不正之弊一。由レ是、前賢遵承、拳拳奉行、有二教化一有二条理一有二始終一。紹興之末、叢林尚有二老成者一、能守二典刑一、不三敢斯須而去二左右一。近年以来、失二其宗緒一、綱不レ綱紀不レ紀、雖レ有二綱紀一、安得而正レ諸。故曰、挙二一綱一則衆目張、弛二一機一則万事堕。殆乎綱紀不レ振、叢林不レ興。惟古人体レ本以正レ末。但憂二法度之不レ厳、不レ憂二学者之失所一。其所レ正在二於公一。今諸方主者、以レ私混レ公、以レ末正レ本。上者苟レ利不レ以レ道、下者賊レ利不レ以レ義。上下謬乱、賓主混淆、安得二衲子向レ正而叢林之興一乎。〈与二尤侍郎一書〉

という尤侍郎に与えたものである。ここにいう尤侍郎とは侍郎の尤袤（字は延之、遂初居士、一一二七―一一九四）のことを指しているものと見られ、[14] 大慧派の拙庵徳光などとも親しい交流をなしている。[15] 慧暉は書簡の中で、唐代の百丈懐海（大智禅師、七四九―八一四）が草創した『百丈清規』の古規を重んじ、また真歇清了や宏智正覚さらに大慧宗杲らに代表される紹興年間（一一三一―一一六二）の末年までの禅者らの厳しい学人接化のあとかたを追慕しながら、慧暉当時の公私混同した禅林の状況を憂えている。当然、内容からして慧暉の晩年に当たる乾道年間（一一六五―一一七三）から淳熙年間（一一七四―一一八九）の頃の江浙禅林の現状を踏まえた発想といってよい。[16]

さらに第三に挙げられる書簡とは、

良玉未レ剖、瓦石無レ異、名驥未レ馳、駑駘相雑。逮二其剖而瑩レ之馳而試レ之、則玉石駑驥分矣。夫衲子之賢徳而未レ用也、混二於稠人中一、竟何弁別。要在二高明之士一、以二公論一挙レ之、任以二職事一、験以二才能一、責以二成務一。則与二庸流一迥然不レ同矣。〈与二或庵一書〉

という、やはり行機と同門の或庵師体（一一〇八―一一七九）に与えたものである。[17] 玉石混淆している叢林の修行者の中で、如何にして高明の士を弁別するかに腐心している両者のさまが偲ばれる。

当時の曹洞宗は黙照の禅旨を高く唱導したとはいえ、その

実際の学人接化においては、やはり叢林の規矩を基底とした具体的な方法を用いていたはずである。すでに北宋末期の大洪報恩(一〇五八―一一一一)に『受菩提心戒文』や『落髪受戒儀文』の著述が存したとされ[18]、また報恩の法嗣である大洪山の浄厳守遂(一〇七二―一一四七)にも『潙山警策註』一巻が残されていることにも[19]、そうしたありようが窺われよう。先の三編の書簡からして、慧暉も同様に厳格な叢林の規矩を重んじる禅者であったことが知られ、真の学人の接得に邁進していたさまが偲ばれる。

六牛図の編集

ところで慧暉には、古来、その独特の機関として『六牛図』の撰述が存したことが知られている。この点を慧暉に関する諸史料に窺うに、

嘉泰
会元
五家…師有二六牛図一。(以下、六牛図の全文を載せる)
続伝
南宋
紹興…嘗撰二六牛図頌一、以見レ意。
上虞…嘗撰二六牛図頌一、以見レ意。
四明
両浙
新続

ということになり、『普燈録』をはじめとする燈史や『南宋元明禅林僧宝伝』には何らの記載も存していないが、わずかに『五家正宗賛』に「師に六牛図有り」として、具体的に『六牛図』の全文を記しており、『紹興府志』と『上虞県志』の「慧暉」の項にも「嘗て六牛図頌を撰し、以て意を見わす」という記述が見い出せ、慧暉に『六牛図頌』の作があったことを伝えている。

また光緒一七年刊『上虞県志』巻三六「経籍志」の「釈家」には、さらに具体的に、

六牛図頌□巻〈万歴志。宋釈慧暉撰。姓張氏、号自得。初依二澄照寺一、後主二天童法席一。〉

と記されている。慧暉が後に天童山の法席を主ったとする点は問題ではあるが、少なくともこれらによれば、慧暉がかつて『六牛図頌』というものを撰述し、自らの示す禅を明確にしたことが知られるのであり、それがかなり後代においても慧暉の撰述として何らかのかたちで浙江の叢林に残存していたものと解される[20]。巻数が記されていないのは、短編であるため不分巻であったことを意味するものであろう。

しかも、『紹興府志』や『上虞県志』の「慧暉」の項においては、『六牛図頌』を撰したという表現が、雪竇山や浄慈寺に住する記事の前に載せられていることから、『六牛図』

の撰述はおそらく雪竇山や浄慈寺に住する以前の比較的早い時期に著されているものと推測される。

この『六牛図頌』は当時の曹洞系の撰述としてはきわめて特異なものであり、慧暉の禅風を特色づける上でも注目すべきものとなっていることから、以下、少しく論じてみることにしたい。すなわち、慧暉の『六牛図頌』に関しては、現在、『禅門諸祖師偈頌』巻四と『五家正宗賛』巻三という二つの資料に実際にその全文が挙げられている。ただし、若干の語字の異同が見られるので、以下、煩瑣にわたるものの、それぞれの全文を載せておきたい。

はじめに『禅門諸祖師偈頌』巻四（下之下）の方であるが、[21] 有名な「梁山廓庵則和尚十牛頌」につづいて、つぎのごとく載せられている。

自得暉和尚六牛図

始従知識示誨、即起信心。信心既萌、永為道本。故牛首上一点白。

一念信為本、千生入道因。自憐迷覚性、随処染埃塵、野艸時時緑、狂花日日新。思家無計得、但覚涙沾巾。

信心既萌、念念揩磨。忽爾発明、心生歓喜。最初入頭、故頭全白。

問訊這牛児、知非何太遅。抛家経幾劫、逐妄許多時。念念帰無念、思思絶所思。入頭従此始、次第証無為。

既有発明、漸漸熏煉、智慧明浄、未能純一、将白半身。

看牧幾春秋、将成露地牛、出離芳艸去、向近雪山遊。正念雖帰一、邪思尚混流、脱然心迹尽、六処不能収。

更無妄念、唯一真心、清浄湛然、通身明白。

六処不能該、優曇火裏開、了然無繫属、明浄絶纖埃。縄索将無用、人牛安在哉。迢迢空劫外、仏祖莫能猜。

心法双忘、人牛俱泯、永超象外、唯一空空。是名大解脱門仏祖命脉。

人牛消息尽、古路絶知音。霧巻千岳静、苔生三径深、心空無所有、情尽不当今。把釣翁何在、磻溪鎖緑陰。

命根断処、絶後再甦、随類受身、逢場作戯。只改旧時人、不改旧時行履処。

妙尽復窮通、還帰六道中。塵塵皆仏事、処処是家風。皓玉泥中異、精金火裏逢。優游無間路、随類且飄蓬。

当時、すでに廓庵師遠の『十牛図』と並んで慧暉の『六牛図』が広く叢林に流布していた事実が知られよう。ただし、「禅門諸祖師偈頌目録」（巻下之下）によれば、「輝自得六牛頌」という表題になっており、実際には図は載せられていないわけであるから、目録に示される『六牛頌』という方が相応しい表現であろう。

この『禅門諸祖師偈頌』とともに、『五家正宗賛』巻三「自得暉禅師」の章にも、

師有六牛図。一曰、始聞知識示誨、即起信心。信心既萌、

永為二道本一。故牛首上一点白。一念信為レ本、千生入道因。自憐迷二覚性一、随処染二埃塵一、野草時時緑、狂花日日新。思レ家無二計得一、但覚涙沾レ巾。二曰、信心既発、念念揩磨。忽示発明、心生二歓喜一。最初入頭、故頭全白。問二訊者牛児一、知レ非何太遅。抛レ家経二幾劫一、逐レ妄許多時。念念帰二無念一、思思絶二所思一。入頭従レ此始、次第証二無為一。三曰、既有二発明一、漸漸熏煉、智慧明静、未レ能二純一一、将レ白二半身一。看牧幾春秋、将レ成二露地牛一、出二離荒草一去、向二近雪山一遊。正念雖レ帰レ一、邪思尚混流、脱愁心迹尽、六処不レ能レ収。四曰、更無二妄念一、唯一真心、清浄湛然、通身明白。六処不レ能レ該、優曇火裏開、了然無二系属一、明浄絶二纎埃一。縄索将無レ用、人牛安在哉。迢迢空劫外、仏祖莫二能猜一。五曰、心法双忘、人牛俱泯、永超二象外一、唯一空空。是名二大解脱門仏祖命脈一。人牛消息尽、古路絶二知音一。霧捲千巌静、苔生三径深、心空無二所有一、情尽不レ当レ今。把釣公何在、磻渓鎖二緑陰一。六曰、命根断処、絶後還甦、随レ類受レ身、逢レ場作レ戯。只改二旧時人一、不レ改二旧時行履処一。妙尽復窮通、還二帰六道中一。塵塵皆仏事、処処是家風。皓玉泥中異、精金火裏逢。優游無間路、随レ類且漂蓬。

として『六牛図』の全文を伝えている。[22]『禅門諸祖師偈頌』と『五家正宗賛』では、その字句に若干の異同が存していることが知られる。いずれの資料もその撰述の場所や年時などの記載は何ら載せられていない。

『紹興府志』や『上虞県志』によれば『六牛図頌』と記されれ、また先の二資料とも『六牛図』となっていることから、おそらくは図に頌を付したものがかなり禅林に親しまれていたものと解される。このように元来は図に頌が付された形式であったはずであるが、図の方はいまに伝えられず、頌の全文が残されているにすぎない。したがって、この場合は単に『六牛頌』という方が相応しいのかも知れないが、いまは便宜上、『六牛図』という表記で統一しておきたい。

しかしながら、この『六牛図』に慧暉自身の序文や跋文のごときものが付されていたか否かも、また具体的に如何なる図が付されて叢林に流布していたのかも定かでない。もちろん、この『六牛図』がそれなりに叢林の修行者に好まれていたのであれば、何らかのかたちで版木に刻まれ、刊行されて広まっていたものとも解されよう。

牧牛を題材に悟境の深まりを図と偈頌の形式で表現する風が中国禅林に流行するようになるのは、北宋中期に洞山派下の清居皓昇(浩昇とも)が『牧牛図』一二章いわゆる『十二牛図』を撰したことに始まるらしく、これを契機に禅門各派にこの風が興っている。[23]皓昇の系譜と慧暉のそれを併記すれば、

洞山良价―曹山本寂
―青林師虔―石門献蘊―石門慧徹―石門紹遠―清居皓昇
―雲居道膺―同安道丕―同安観志―梁山緣観―大陽警玄―
―投子義青―芙蓉道楷―丹霞子淳―宏智正覚―自得慧暉

となり、同じ曹洞の流れに属しており、あたかも慧暉の『六牛図』は皓昇の『十二牛図』を半分に簡略化したものとも解されよう。

また嗣承は不明ながら北宋末期の太白山普明が『牧牛図』一〇章（十牛図）を撰し、雲門宗の法雲惟白（仏国禅師）も『牧牛図』八章（八牛図）を撰したとされている。さらに南宋初期には朗州（湖南省）武陵県北三〇里の梁山観音禅寺に住した楊岐派の廓庵師遠（則公）がその後の禅林に大きな影響を与える『十牛図』を撰するに至っている。[24]

慧暉の『六牛図』もこうした禅家の牧牛図作成の延長線上にあるわけで、師遠が楊岐派五祖下の南堂道興（初名は元静、一〇六五―一一三五）の法嗣であって、慧暉より一世代早いかほぼ同世代の人であることから、慧暉の『六牛図』は師遠の『十牛図』と同時期か若干は遅れて撰されているものと見られる。ただ、湖南と浙江でもあり、両者が互いに相手を意識して撰述したものではないであろう。[25]

慧暉の『六牛図』はおよそ「起信」「初入」「薫煉」「無妄」「超象」「随類」の語句によってそれぞれ表現することができ、黒牛がしだいに白牛へと変わっていく過程を順次に示している。[26]

とくに「起信」からはじまっているのは注目してよく、「牛首上一点白」とあって、起信の黒牛はすでに頭上に一点の白を有している。起信が千生入道の因すなわち道本として重んぜられているわけである。善知識の示誨を聞いて信心を起こした、いわゆる初発心の時点から、すでに弁道の履践が展開しているとするのであり、慧暉の『六牛図』の一つの特徴といえよう。一念の信心を萌すことが、永く道を成就する千生入道の因となるというのであり、それまで覚性（悟り）に迷って随処に塵埃に染まっていたことを深く反省するありようといえる。

つぎの「初入」から「超象」までは解脱空劫の境界の深まりを示すものである。第二の「初入」とは はじめて悟りの手掛かりを得た消息であり、牛の頭はすべて白く描かれている。一念一念に揩磨精進し、忽然と発明して心に歓喜を生じ、しだいに無為を証していくありようである。

第三の「未純」とは、すでに発明した後、さらに熏煉しつづける消息である。智慧は明浄であっても邪思がなお存していまだ純一でなく、修行がなお中途であることから、牛は半身のみ白く描かれている。

第四の「真心」とは、妄念がなくなって、ただ一真心のみとなり、清浄に徹した消息であり、牛を捕まえておく縄索なども必要でなくなった人牛一枚のありようを述べている。一応は修行を究めた世界といえよう。

第五の「双忘」とは、心法が双べ忘じ、人牛がともに泯じ、物外に超えて空に徹したありようであり、人牛ともその

消息を断っていることから、仏の大解脱門を意味する一円相で表現され、仏祖の命脈を保任した世界を述べている。

そして、これが再び六道の現実世界に還帰する第六の「遊戯」または「随類」の妙用へと転ずるのである。ここでは悟りの世界にも留まらず、絶後に再び甦り、塵々みな仏事、処々これ家風として、その場その場を遊戯三昧でこなしていくことを述べている。師遠の『十牛図』にいう「入鄽垂手」に当たるものといえよう。[27]

このように慧暉の『六牛図』を含めて、禅の悟境の深まりを段階的に説く牧牛の図頌自体が、すでにきわめて看話見性的な色彩を示すものであり、見性悟道を重んじる中国禅の延長線上にあるといってよい。とくに大慧宗杲による看話禅の隆盛を背景に、この牧牛を題材とした一連の図頌が禅林に好まれるようになっている。しかるに慧暉は宏智正覚が示寂して以後の曹洞の重鎮として、黙照の禅風を守持していた中心人物と目される禅者である。この間の動向を如何にとらえたらよいのであろうか。[28]

かつて宗杲は紹興年間に福州(福建省)侯官県の雪峰山崇聖禅寺にあった真歇清了らを対象に大々的な黙照禅批判を展開し、当時の曹洞宗を大悟を撥無し空無に堕した枯木死灰の禅のごとくに評している。確かに黙照の真意を解せずに、悟門そのものを信ぜず、単なる無事禅に陥る亜流も存していたらしい。

慧暉は久しく長蘆寺の清了に随い、後に天童山の正覚により大悟嗣法した人である。ここにともすれば亜流に堕しやすかった黙照の真意を如何に示すかが、慧暉にとって重要な課題となったのであろう。慧暉の『六牛図』は、黙照の徒に対する臨済系などよりの批判に、曹洞宗の側から十分に応えんとしたものではなかったかと推測される。

そして、それは当然、同時に曹洞宗内部への警笛の意をも含んでいたはずである。清了や正覚が唱導した黙照の禅風が一応のかたちを呈した後、慧暉はこれを如何に正しく維持するかに力を注いだのである。しだいに江南禅林を風靡し尽くす感を見せていた看話禅系からの批評をどう受け止めるかに、慧暉の腐心が存したのかも知れない。

南宋末期の大慧派の詩僧である物初大観(一二〇一―一二六八)は『物初賸語』巻一三の「牧牛図序」において、

牧牛徹二於懶安一、至二梁山・自得一、則図而品二目之一、皆所三以教二人牧一也。

という表現をなしている。ここにいう懶安とは潭州(湖南省)寧郷県の大潙山密印禅寺に住した南岳下の長慶大安(七九三―八八三)のことであり、「牧牛は懶安より徹り」という表現は、『景徳伝燈録』巻九「福州長慶大安禅師」の章に、

安在二潙山一三十来年、喫二潙山飯一、屙二潙山屎一、不レ学二潙山禅一、

只看二頭水牯牛一。（中略）如今変作二箇露地白牛一、常在二面前一、
終日露迴迴地、趁亦不レ去也。

とある「懶安白牯」の古則に因むものであろう。牛を牧することをもって禅の修行に準える発想はこの長慶大安に始まったというのであり[29]、後に梁山の廓庵師遠が『十牛図』を、慧暉が『六牛図』をそれぞれ著し、図に品目を付したかたちであったため、学人の修行に便宜をなしたというのである。

大観は師遠と慧暉の二禅者を並立して扱っており、これによっても、慧暉の作が師遠のそれとともに広く叢林に流布し、当時の修行僧の指標となっていた事実を知ることができよう。そして、無準下の希叟紹曇も慧暉の『六牛図』を『五家正宗賛』に収め、南宋末期と見られる五老峰子昇らもこれを『禅門諸祖師偈頌』に収めているわけである。

ちなみに慧暉の遠孫に当たる元代曹洞の重鎮である雲外雲岫（一二四二―一三二四）にも『雲外和尚語録』「偈頌」に、

礼二浄慈自得和尚塔一

六牛図出新豊曲、妙唱難レ斉和転化。慧命一糸門戸重、不レ教三衰
涙落二庭莎一。

という偈頌が伝えられている。これは雲岫が浄慈寺に到って慧暉の墓塔を礼した際のものであり[30]、雪竇山のみでなく浄慈寺にも慧暉の墓塔が建てられていた事実が知られる[31]。それとともに、このとき雲岫は『六牛図』を通して慧暉の門風をとらえていたことが窺われるのであって、その後、久しく宏智派において慧暉の『六牛図』が偏正五位の相承などとともに新豊の曲すなわち曹洞の宗旨として重んぜられていたことが判明するわけであり、先の『紹興府志』や『上虞県志』の記載からすれば、宏智派が断絶して以降も慧暉の『六牛図』は何らかのかたちで明・清代まで浙江の禅林に依用されていたものと推測される。

では、なぜ師遠の『十牛図』などに比して、慧暉の『六牛図』はそれほど中国・日本の禅林に一般化しなかったのか、とりわけ日本禅林にほとんど定着しなかったことが不可解である。これはおそらく『十牛図』が広く行なわれるようになったために、あえて『六牛図』を使用する必要がなかったことも挙げられようが、慧暉が宏智派に属していたために臨済宗の禅者がこれを依用することが少なく、また道元の永平下が見性悟道の段階的な禅を退けていることから、曹洞宗でほとんど注目されることがなかったためと見られる。

ただ、わずかに大正一四年（一九二五）に広谷国書刊行会から出版された『近世仏教集説』の中に、橘染子（一六六七―一七〇五）の著『故紙録』という小品が収録されているが、その中に狩野探雪の描いた「六牛図」に、江戸中野（中野区上高田）にある臨済宗妙心寺派の慈雲山龍興寺第三世の雪巌全底に賛を願ったことが記されている[32]。

燈史・僧伝に載る上堂

福州（福建省）閩県の鼓山湧泉禅寺にて晦室師明が嘉熙二年（一二三八）に編した『続開古尊宿語要』には、曹洞下の禅者として「曹山寂禅師語」「投子青和尚語」「芙蓉楷禅師語」「真歇了禅師語」「宏智覚和尚語」「古巌璧禅師語」「金粟智和尚語」という七人の語要を収録しているが、残念ながら慧暉の語要は収められていない。したがって、慧暉の示衆や上堂語さらに問答などは燈史・僧伝に載るものに限られるわけである。いま、燈史・僧伝などの慧暉の章を整理してみると、いくつかの示衆・上堂・問答などが知られている。

はじめに『聯燈会要』に収められるものとして、

(1)示衆云、真機独立、卓爾不レ群、覿面無レ私、対揚有レ準。不レ堕二諸縁之後一、妙超二造化之先一。衆生背レ之、而逐レ浪迷レ源、諸仏証レ之、而截レ流到レ岸。設使波澄二大海一、風清而未レ許レ停レ舟、雲散二長空一、月朗而豈容二披照一。当陽顕赫、大地該通、一句全提、十方普応。黄花翠竹、咸彰二妙徳家風一、松韻泉声、尽証二円通境界一。直得二恁麼一、猶是門庭施設。止二宿草庵一、入理深談、猶隔レ生在。所以道、任二汝頭頭上了物物上明一、只喚作二了事底人一。須レ知有二尊貴辺事一。直饒如二両鏡相照光影互融一、亦只喚作二光影辺事一。更須レ知有二到レ家時節一。合作麼生。人帰二大国一方成レ器、水到二滄溟一始是波。

(2)示衆云、巣知レ風穴知レ雨、甘草甜黄連苦。不レ須三計較作二商量一、五五従来二十五。万般施設只如レ常、此是叢林飽参句。諸人還委悉麼。野老不レ知堯舜力、鼕鼕擂鼓祭二江神一。

(3)示衆云、懸崖撒レ手、自肯承当、絶後再甦、欺レ君不レ得。若向二這裏一見得、便能全人即レ境、全境即レ人、人境一如、十方通徹。在二一塵一而見レ性、即二一性一以全真。有時閙市横レ身、有時寒巌宴坐、有時賓中弁レ主、有時主中弁レ賓、有時賓主交参、有時主賓互用。諸人還相委悉麼。我是法中王、於レ法得二自在一。

(4)示衆云、二千年前、吾仏世尊拈レ花示衆。唯有二金色頭陀一、破顔微笑。世尊云、吾以二正法眼蔵涅槃妙心一、分二付摩訶大迦葉一。自レ後遞レ代、以心伝心、直指人心、見性成仏。譬如二金翅鳥一、扇開二大海一、直取二龍呑一、擬議不レ来。白雲万里、唯在二一念一自肯、不レ落二意思一、不レ堕二情識一。徳山棒、臨済喝、竹韻松声、驢鳴犬吠、莫レ不三尽是発二揚此事一。自レ是諸人、開レ眼尿レ床、対面蹉過。且道、諸訛有二甚麼処一。擲二下拄杖一云、三十年後、不レ得二錯挙一。

という四つの示衆が伝えられている。(1)の示衆などは宏智正覚の黙照の禅旨を受ける本覚的発想であり、自己の本家郷に帰するべきことが力説されている。(2)では叢林飽参の句として、仏法を人為的に詮索することを誡めている。[33] (3)の示衆は唐末の臨済義玄（？―八六六）の「四賓主」の機関を意識したものであって「見性」の語句などが見られる。(4)も「世尊拈花」の古則に因んでおり、中国禅宗の標語ともいうべき「正

法眼蔵涅槃妙心」「以心伝心」や「直指人心」「見性成仏」などの語句をそのままに強調し、あらゆる調べをすべて仏法の発揚として押さえている。

また、つぎの『普燈録』になると、『聯燈会要』とは別に、

(5)上堂曰、朔風凛凛掃寒林、葉落帰根露赤心。万派朝宗船到岸、六窗虚映芥投針。本成現莫他尋、性地閑閑耀古今。戸外凍消春色動、四山渾作木龍吟。

(6)上堂。釈迦老子、窮理尽性、金口敷宣、一代時教、珠回玉転、被人喚作拭不浄紙。達磨祖師、以一乗法、直指単伝、面壁九年、不立文字、被人喚作壁観婆羅門。且道、作麼生行履、免被傍人指注去。衲帔蒙頭万事休、此時山僧都不会。

(7)上堂。挙風幡話。師曰、風幡動処著得箇眼、即是上座。風幡動処失却箇眼、即是風幡。其或未然、不是風幡不是心、衲僧徒自強錐針。岩房雨過昏煙浄、臥聴涼風生竹林。

という三上堂が載せられている。時代的にも近い『聯燈会要』と『普燈録』がまったく別個の示衆・上堂を収録していることは注目されよう。(5)は上堂というより七言の偈頌といえるものであり、内容は万物が兆そうとする冬至か歳旦の消息を語っている。(6)は初祖菩提達磨の面壁坐禅に因んで只管打坐を強調するものであり、万事を休罷した黙照のありようが示されているといってよい。(7)は六祖慧能(六三八―七一三)の「風幡問答」に対する拈提にほかならない。

さらに『五燈会元』やその後の『続伝燈録』などの燈史に至ると、(5)と(6)の上堂を載せた後に、

(2)上堂。巣知風穴知雨、甜者甜兮苦者苦。不須計較作思量、五五従来二十五。万般施設到平常、此是叢林飽参句。諸人還委悉麼。野老不知堯舜力、鼕鼕打鼓祭江神。

(8)上堂。谷之神、枢之要、裏許旁参、回途得妙。雲雖動而常閑、月雖晦而弥照。賓主交参、正偏兼到。十洲春尽花凋残、珊瑚樹林日杲杲。

という上堂が存している。(2)は示衆と上堂の違いであるが、『聯燈会要』のものとは字句に若干の異同が存している。また(8)は『老子』の谷神・枢要の語句に因み、曹洞の「偏正五位」や臨済の「四賓主」などを意識した上堂である。そして、つぎに、

(9)僧問、如何是正中偏。師曰、昨夜三更星満天。曰、如何是偏中正。師曰、白雲籠嶽頂、終不露崔嵬。曰、如何是正中来。師曰、莫謂鯤鯨無羽翼、今日親従鳥道来。曰、如何是偏中至。師曰、応無跡用無痕。曰、如何是兼中到。師曰、石人衫子破、大地没人縫。

という一僧との問答を伝えているが、これはまさに「偏正五位」に関する内容であって、曹洞宗旨を問題にするものである。しかも僧の問いのかたちを取っているものの、第四位は

「偏中至」であって、先に述べた「五位頌」での「兼中至」と相違している点は注目してよい。[34] さらに上堂として、

(10)上堂。皮膚脱落絶二方隅一、明二了身心一一物無。妙入二道寰深静処一、玉人端馭白牛車。妙明田地、達者還稀、識情不レ到、唯証方知。白雲児霊霊自照、青山父卓卓常存。機分二頂後光一、智契二劫前眼一。所以道、新豊路兮峻仍嶷、新豊洞兮湛然沃。登者登兮不二動揺一、游者游兮莫二忽速一。亭堂雖レ有到人稀、林泉不レ長尋常木。諸禅徳、向上一著、尊貴難レ明。瑠璃殿上不レ称レ尊、翡翠簾前還合伴。正与麼時、針線貫通、真宗不レ墜、合作麼生施設。満頭白髪離二巌谷一、半夜穿レ雲入二市廛一。

(11)上堂。挙傅大士法身頌云、空手把二鋤頭一、歩行騎二水牛一、人従二橋上一過、橋流水不レ流。雲門大師道、諸人、東来西来南来北来、各各騎二一頭水牯牛一来。然二雖如レ是、千頭万頭、祇要レ識二取這一頭一。師曰、雲門尋常乾爆爆地錐箚不レ入、到二這裏一、也解二拖泥帯水一。諸人、祇今要レ見二這一頭一麼。天色稍寒、各自帰堂。

という二上堂が載せられており、その後に(7)の上堂を付して全体がまとめられている。(10)の上堂には皮膚脱落や身心の語が見られ、「白雲子青山父」という新豊洞の路すなわち洞山の宗旨が強調されている。また(11)は傅翕（傅大士、四九七―五六九）の「法身頌」の水牛や、雲門文偃（匡真禅師、八六四―九四九）の「水牯牛」の話頭に因む上堂であって、[35] 慧暉自身の『六牛図』にも通ずる発想として注目される。

このように『五燈会元』に至ると、上堂語がかなり増加しているのであって、『続伝燈録』や『祖燈大統』などその後の燈史も、若干、順番が相違する箇所が見られるものの、ほぼこの『五燈会元』の立場を踏襲しているようである。いずれにせよ、燈史によれば、慧暉には少ないながら一一種に及ぶ上堂・示衆・問答が伝えられていることになろう。

このほか、『六牛図』を載せる『五家正宗賛』巻四の「自得暉禅師」の章では、慧暉のことばとしてほかに(2)と(10)の二上堂を掲載している。また『南宋元明禅林僧宝伝』では、(5)と(6)と(2)と(8)の四上堂を普陀山観音宝陀寺でのものとして扱っており、(10)の上堂を浄慈寺でのものとして収録している。さらに『新続高僧伝四集』では(5)と(8)と(7)の三上堂を載せるのみである。

ところで、これらの上堂の中で『霊竺浄慈自得禅師録』に載るものが何ら見られないことは、この秘録が実際の慧暉の上堂・示衆・問答のことばを踏まえずに編纂されたものであろうことを如実に窺わしめるものではなかろうか。[36]

頌古の作成

さらに『禅宗頌古聯珠通集』には「続収」（または「増収」）の部分に「自得暉」として慧暉の作になる頌古も見い出すことができる。したがって、慧暉の頌古は越州山陰県の天衣万

寿禅寺（法華山天衣寺）の魯庵普会が元の延祐四年（一三一七）に増収した中に存していることになる。[37] いま、慧暉の扱った古則（仮題）とその頌古を列記してみることにしたい。

巻三には那吒太子が骨肉を父母に帰して本身を現じた「那吒説法」の古則に対して、

(1)那吒太子本来身、卓卓無依不レ受レ塵、雲散水流天地静、籬間黄菊正争レ春。

という頌古を残している。これは父母未生已前の自己（本来身）を問題とするものであって、塵埃を受けず卓卓無依なる本来身が雲が散じ水が流れる天地自然の春の風光の中に詩われている。[38]

巻五には『文殊所説般若経』の「清浄行者不レ入二涅槃一、破戒比丘不レ入二地獄一」の古則に対して、

(2)夜来村飲帰、健到三四五、摩二挲青苺苔一、莫レ瞋驚二著汝一。

という頌古を残しており、これも本来身を問題にするものといってよい。

巻七には六祖慧能の「六祖風幡」の古則に対して、

(3)是風是旛君莫レ疑、百草叢中信レ歩帰、王道太平無二忌諱一、戯蝶流鶯遶レ樹飛。

(4)不二是風旛一不二是心一、衲僧徒自強錐鍼、巌房雨過昏烟静、臥聴涼風生二竹林一。

という二首の頌古を残している。いずれも人間の分別作為を持ち込まないありようが理想として詩われており、とりわけ、(4)は上堂の(7)を受けるものである。

巻一〇には南岳下の百丈懐海（七四九―八一四）の「百丈野狐」の古則に対して、

(5)一人道二不落一、一人道二不昧一、夜来一陣狂風生、浪打二石頭一如レ粉砕。

と述べている。不落因果と不昧因果の二つの立場に対して、一陣の強風が起こって浪が岩を粉砕するごとく砕けたというのである。

巻一七には青原下の百巌明哲と洞山良价（八〇七―八六九）との「洞山払袖出去」の古則に対して、

(6)枯木巌前烟嶂昏、羚羊挂レ角覓無レ門、玉梭暗擲千峯外、一線虚通暁色分、弧迴迴絶二瘢痕一、万古寒潭攪不レ渾、正坐当レ堂金殿冷、回レ頭尽是我児孫。

という八言七句の頌古を残しており、そこには羚羊が角を挂ける没蹤跡のありようが示されている。

巻二〇には南泉門下の趙州従諗（七七八―八九七）の「趙州喫茶去」の古則に対して、

(7)百尺竿頭氈二布巾一、上頭題作酒家春、相逢不レ飲空帰去、洞裏桃花笑二殺人一。

という頌古を、また同じく巻二〇の「趙州勘菴主」の古則に対しても、

(8)菴主当年用得親、衲僧眼裏要レ生レ筋、趙州舌有二龍泉剣一、開レ口等閒疑二殺人一。

という頌古を残している。このように慧暉には趙州従諗の口唇皮禅に私淑していたさまが窺われる。

さらに巻二二には黄檗下の睦州道蹤の「睦州一重」の古則に対して、

(9)重重去尽自平常、春暖風和日漸長、戸外鳥啼声細砕、巖花狼藉満二山房一。

という頌古が載せられているが、これは明らかに『南宋元明禅林僧宝伝』が伝える晩年の雪竇山閑居期の偈頌と一致しており、慧暉の老郷を託した貴重な頌古といえよう。

同じく巻二二には百丈下の黄檗希運（?―八五六?）と相国の裴休（河東大士、七九七―八七〇）との問答である「裴相国応諾」の古則に対して、

(10)翰墨場中喚得回、桂林昨夜覚二花開一、暗香漏泄通二消息一、散作人間調鼎才。

という頌古を残している。裴休が希運に参じて師資証契した消息、いわば悟りの機縁を問題とした頌古である。

巻二三には高安大愚の高弟である末山尼了然の「末山男女相」の古則に対して、

(11)非二男女相一独閒閒、正体堂堂孰可レ攀、一句不レ伝千聖眼、九天風静月彎彎。

という頌古を残しており、男女の相を超えた真如仏性の月が詩われている。

巻二四には洞山良价の「洞山不老朽」の古則に対して、

(12)上座莫レ要礼二老朽一、興平未レ易揚二家醜一、尊貴従来不レ出レ門、渠儂豈在二威音後一。

という頌古を残しており、ここでも老朽することのない威音王以前の消息が課題となっている。

巻二七には石霜下の九峰道虔の「九峰午夜黄金」の古則に対して、

(13)午夜山房月色深、十分明白堕二功勛一、撥二開向上通天竅一、烟嶂重重不レ見レ人。

という頌古を残しており、同じく巻二七には夾山下の洛浦元安（八三四―八九八）の「洛浦千仏供養」の古則に対して、

(14)故山岌岌鎖二寒烟一、未レ肯将レ心軽授伝、玉女夜尋無字印、石人遥指月明前。

という頌古を残している。さらに同じく巻二七には夾山下の韶山寰普の「韶山是非不到」の古則に対して、

(15)一片孤雲不レ露レ醜、白雲児倚二青山父一、鶴巣霊滴夢初回、新月半鉤升二万戸一。

という頌古を残している。青山の父に寄る白雲の子に託して是非不到の消息が示され、新如の月が万戸を照らすことに譬えられている。とくに(11)(13)(14)(15)がともに月を題材にした頌古

である点は特徴的であろう。

巻二八には徳山下の雪峰義存（八二二―九〇八）の「雪峰寂寂無依」の古則に対して、

(16)寂寂無依病正深、雪老当年痛処針、一喚喚回春夢破、千山渾作二木龍吟一。

という頌古を残している。

巻二九には洞山下の曹山本寂（八四〇―九〇一）と雪峰下の鏡清道怤（八六八―九三七）との「曹山心径苔生」の古則に対して、

(17)心径苔生何処去、謝家人不レ在二漁船一、蘆花万頃水天濶、白鳥深沈任二転旋一。

という頌古を残している。同じく巻二九には洞山良价と曹山本寂との「曹山不打飛鳶嶺」の古則に対して、

(18)不レ打二飛鳶一便到来、大円鏡裏絶二塵埃一、東君節令分明也、桃李年年二月開。

という頌古を残している。

巻三四には石霜系の同安常察（あるいは洞山系の同安道丕か）の「同安鳳棲家風」の古則に対して、

(19)三世如来一口呑、故山深静月黄昏、光分二頂後一千門曉、坐看春回入二焼痕一。

という頌古を残しており、巻三六には雲門下の双峰竟欽の「双峰応供四天下」の古則に対して、

(20)混而不レ雑体常虚、雪月交レ光類莫レ如、応処万端無二罣礙一、片雲自在巻還舒。

という頌古を残している。(19)(20)でもやはり月が取り上げられている。

このように慧暉に関しては、合計一九則二〇頌が伝えられ、どちらかというと青原系の祖師の古則を多く用いていたことが知られる。ちなみにこの中で『雪竇寺誌』巻五上「法要」の慧暉の項には、(1)(6)(7)(9)(13)(14)(15)(16)(17)(19)という一〇則の頌古が収められている。いずれにせよ、これらの頌古を収めた慧暉の語録が何らかのかたちで『禅宗頌古聯珠通集』の増収部分の編纂される元代までは残されていたことになろう。伝えられる頌古の数こそ比較的に少ないながら、慧暉もやはり師翁の丹霞子淳が作成した『丹霞淳禅師頌古』や師の宏智正覚が作成した『泗州普照覚和尚頌古』などの影響を受けて頌古の作成をなしたものと見られる。

後世の評価

ところで、示寂して後の南宋禅林における慧暉の評価には如何なるものが存したであろうか。すでに早く「瑞巌石牕禅師塔銘」によれば、

公卿名士為二方外交一者甚衆。丞相魏公、晩歳与レ師尤厚、嘗嘆曰、自得如二深雲中片石一、石窓則空門中御史也。緇流以為二名言一。

という記事が見られる。これによれば、多くの公卿・名士すなわち官僚士大夫らが石窓法恭と方外の交をなしたことが知られ、とくに丞相の魏公すなわち史浩（字は直翁、真隠居士、一一〇六―一一九四）は、晩年に法恭ともっとも道交が厚く、かつて慧暉と法恭を「自得は深雲中の片石の如く、石窓は則ち空門中の御史なり」と賛嘆したとされる。[39] そして、この評価は叢林の禅者（緇流）の間で名言として称えられたという。当時、すでに慧暉と法恭を宏智門下の二甘露門として並べ称する風が存した事実が知られるわけであり、当然、史浩としては法恭のみでなく、慧暉とも何らかの交渉が存したものと推測されよう。

ところで、入宋して虎丘派の無準師範の法を嗣いだ東福円爾（聖一国師、一二〇二―一二八〇）が日本に将来した『宗派図』には、曹洞宗の「天童覚」の法嗣として「翠岩宗」「中岩済」「石窓恭」「自得暉」の四人の名が挙げられている。[40] 翠岩宗とは明州鄞県西南の翠巌山移忠資福禅寺の聞庵嗣宗のことであり、この人はすでに述べたごとく正覚より年長でその筆頭の嗣法門人である。宏智下を代表する禅者として目されていたのは、まさにこの嗣宗・慧暉・法恭の三人であったといってよい。ただ、いま一人の中岩済とはおそらく「宏智禅師妙光塔銘」に載る正覚の嗣法門人のひとり法済のことを指すのであろうが、この中岩が法済の住持地なのか道号かなのは定かでない。[41] ともあれ、嗣宗が早くに示寂していることから、正覚の後継者としては、慧暉と法恭が二甘露門としての地位を得ることになったわけである。

しかし、南宋末期に活動した無準下の希叟紹曇は『五家正宗賛』巻四「曹洞宗」の「自得暉禅師」の章において、

賛曰、石火電光、雷霆一黙、若耶渓沙裏精金、苧羅山棘中蕀蔔。見真歇挿花装老婦、寧識羞慚。被宏智嚼飯餧嬰孩、敢言自得。蹈翻明暗路、眼睛頭徧地蒺藜、剗断離微根、脚跟下参天荆棘。十成尊貴、駕香車豈輾宸苔、一路平常、祭江神不知舜力。煙霽寒沙孤鷺立、野渓頭雪正糢糊。凍消枯木老龍吟、竹戸外春無消息。道寰深静処、脳後光劫前眼猶是金塵、情識未融時、青山父白雲児総成家賊。正偏兼到、十洲花寧免凋残、収放未全、六牛図有何奇特。長庚門下、掃蕩潑生涯、信神駒有汗血之功、金雞抱司晨之徳。

という賛を付しており、慧暉を宏智派の嫡嗣として位置付けている。そして、清了と正覚の二禅者に参学して曹洞の宗旨を究めた慧暉があえて自得と称したありようを賛し、また『六牛図』の存在にも注意を払っている。

ところで大慧派の北礀居簡（一一六四―一二四六）の法嗣で詩僧として名高い南宋末期の物初大観（一二〇一―一二六八）はその詩文集である『物初賸語』において、慧暉に関する作品をいくつか残している。いま、煩瑣にわたるものの、これ

を順次に列記しておくことにしたい。はじめに巻一六には、

跋張雪窓詩

中興文章人物、不減東都。雪窓振奇於作者間、用心独苦。其匠意定体、如公輸之繩墨、其琢句錬字、如玉人之播璵。人願交之、而不能。乃能周旋於宏智・自得二甘露門、而得受用。今観此詩、有未了此宗。人白首之句、亦可見矣。

という張雪窓という人の詩に付した跋文が存するが、その中に正覚とともに慧暉の名が挙げられている。張雪窓とは張良臣(字は武子、一に字は漢卿)のことであり、襄陽(湖北省)の人であったが、四明の地に遷り住んでいる。隆興元年(一一六三)の進士とされ、生来、学を好んで雪窗先生と称せられ、かなりの文筆家であったらしく、その著に『雪窗小集』一巻が伝えられている。また、その作としてほかに『雪窓集』や『雪窓外集』などが存したとされ、そこには当時の曹洞禅者との交流を伝える多くの資料が存したものらしい。(42)

ところで先の「跋張雪窓詩」によれば、張良臣はかつて晩年の宏智正覚に学び、正覚の示寂して後はさらに慧暉に参じたらしいことが知られるのであり、とりわけ、大観が慧暉を師の正覚とともに二甘露門と称しているのは注目されよう。

また同じく『物初賸語』巻一六には、

跋四老墨跡

参寥・聖徒二名勝、漱騒雅之芳潤、挙翰墨之英華、片言隻字、人争宝之。至於宏智・自得二大士、洞上師法、其酬応翰墨、所謂未能免俗、果較乎工拙之間哉。明窓棐几、如見其人。

という跋文が伝えられており、ここでも大観はやはり慧暉を正覚とともに洞上の嗣法に連なる二大士として扱っている。ちなみに参寥とは参寥子すなわち雲門宗の大覚懐璉(一〇〇九―一〇九〇)の法嗣である妙総禅師道潜(?―一一〇六?)のことであり、また聖徒とは天台宗の清修法久(?―一一四九)の門人である聖徒晞顔(道号は雪渓)のことではないかと推測される。(43) 道潜と晞顔の両者の書簡や文筆は人々の間で当時かなりもてはやされていたようであり、正覚と慧暉の二禅者の墨蹟もこれらと同様のものとして扱われていたことになろう。

さらに『物初賸語』巻一七には、

跋宏智・張雪窓・自得・石窓墨跡

洞上一宗、至大陽明安而絶、柴石老人為求其人而続之。自投子而伝四世、得隰州古仏、丞承祖烈、赫然有光。猗歟休哉。蔡居士過我、出示所蔵一帖。四法師三印頌、真宗髄也。心画爛然、瘦勁銛快。雪窓其宿冤、自得・石窓其破家子、語附其後、正一屋裏人也。於戲新豊曲、果聞寥於今乎。今誰柴石哉、柴石将何求哉。

という跋文も伝えられている。ここでは正覚と張良臣と慧暉

と法恭という四人の墨蹟に対して大観が蔡居士（未詳）の依頼で跋を付しているわけであるが、[44] ここでも張良臣は当時の曹洞禅者と同等の評価を受けている。この墨蹟においては、北宋末期以来の曹洞宗の展開が概略されており、はじめに曹洞宗の大陽警玄（明安禅師）の法門を臨済宗の浮山法遠（柴石老人、九九一―一〇六七）が投子義青に代付相承せしめた事実を語り、さらに四伝して正覚（隰州古仏）が出てその宗を大にしたことを述べている。そして、慧暉と法恭を宏智門下の破家子とし、張良臣をやはり宏智門下の宿冤として推奨しつつ、[45] 大観の当時、すでに慧暉や法恭の門流に人材が少なく、曹洞の宗風がかなり衰微していたことに憂いを致している。

また同じく『物初賸語』一七巻には、

跋二自得帖一

涼泉荒蕞処、耿二此万星中月一。宏智之門、優為二荷薪一、今何有哉。観二其遺墨一、如レ見二其人一。

という慧暉個人の墨帖に対する跋文も伝えられている。慧暉が大いに正覚の門を荷担したことを述べ、その遺墨を目の当たりにしてその人となりを偲んでいるわけである。

一方、大慧派の浙翁如琰（一一五一―一二二五）の法嗣である淮海元肇（一一八九―一二六五）の『淮海外集』巻下「跋」には、

跋二宏智・石窓・自得墨蹟一〈張漢卿跋、在二宏智後一〉

宏智以二無碍法方一、凡一句一偈、皆洞上真宗、為二世宝惜一。大梁張漢卿言、其少時多遊二晋絳間一、隰連レ壤也。此巣レ南嘲レ北、未レ能レ忘レ情耶。自得・石牕、皆克二其家一者、兼収並蓄、宜矣。癡鈍書二于百年之後一、余又題二後四十年一。後之眠今、信非二虚言一也。

という跋文が伝えられ、これも正覚の一句一偈が洞上の真宗を振っていることを述べている。また大梁の張漢卿すなわち張良臣が正覚の墨蹟の後に跋文を寄せ、幼き日に晋州（山西省）・絳州（山西省）の間に遊び、正覚の郷里隰州（山西省）もこれに隣接していたことを偲んだとされる。そして、元肇もやはり慧暉と法恭の二人を克家として扱っているのであり、この三師の墨蹟には、さらに楊岐派の或庵師体の法嗣で天童山二八世にも住した癡鈍智穎も跋文を寄せ、その後さらに四〇年して元肇も跋文を付しているわけである。[46]

さらに大慧派の無文道璨の『無文印』巻一三「祭文」には、「祭二宏智禅師塔一〈代〉」につづいて、

祭二自得和尚塔一〈代〉

師遇二阜陵英主一、倡二天童絶学一。晴光雨色、盪二磨西湖一、水碧山青、照二映東海一。生機活意之在二天下一、百世猶二一日一也。因二如レ是陶冶一、用二如レ是砥礪一、驟翕忽張、陰変陽化。昔従二青山一、見而知レ之矣。鄧峯一枝、晩属二道化之国一、典刑在レ上、雪老霜厳、啓二佑我後人一、咸以正罔レ缺。今願竊有レ請焉。

という祭文が伝えられている。これは道璨が他の依頼を受け

て慧暉の墓塔の祭文を代って撰したものである。おそらくは慧暉の門流の曹洞禅者の依頼で道璨は雪竇山の双塔かあるいは浄慈寺に存した慧暉の墓塔に祭文を記したのであろう。阜陵とは孝宗の墓陵の名であり、英主とは世に賢主と称せられた孝宗を指している。この祭文においても慧暉が孝宗の厚遇を得て、宏智禅の絶字を唱導した点が強調されているわけである。(47)

また同じく『無文印』巻一三「祭文」の「江湖祭二東谷和尚一」には「宏智・自得、骨冷難レ呼、於皇洞宗、師曰在レ余」という表現も見られ、正覚と慧暉の法統を受ける東谷妙光を祀る祭文を製している。(48)

さらに後の語録ながら『慧文正弁仏日普照元叟端禅師語録』巻八「題跋」にも、

跋二宏智・石窓・自得・張漢卿諸老墨跡一

今天下、拠二曲彔木一、以二鉄爐歩一、自冒者。求二一剛正一、如二石窓一、已不レ可レ得、況古淡、如二自得一者乎。求二一古淡一、如二自得一、已不レ可レ得、況典贍麗密、光明俊偉、如二隰州古仏一者乎。宗門号称二本色一、尚皆看不レ上レ眼、副墨之子、洛誦之孫。求二一軒豁磊落一、深信二吾法一、如二雪窓張左蔵一、何異二鑽レ冰索レ火、圧レ沙討レ油哉。焚レ香三復、令二人心意朗然一。回視二今諸方一、作二望レ塵態一、於二形勢之途一者、何其陋耶。

という跋文が伝えられている。これは先に示した『物初賸語』巻一七の「跋二宏智・張雪窓・自得・石窓墨跡一」という跋文を受けるものであり、やはり正覚・法恭・慧暉・張良臣ら諸老の墨跡に対して、元代の大慧派の重鎮であった元叟行端（慧文正弁仏日普照禅師、一二五五―一三四一）が後跋を付したものである。(49) これによれば、法恭は堅く正しい節操を守る剛正の禅者として評価を受け、慧暉の方は老熟した古淡の風を持つ禅者として定評があったらしい。

嗣法門人

慧暉が示寂して以降の江南禅林は、急速に大慧派・虎丘派を中心とする臨済宗楊岐派下一色に尽くされていく感がある。とくに阿育王山広利禅寺や径山興聖万寿禅寺に化を敷いた拙庵徳光（仏照禅師）とその派下（東庵下）の活動は目覚ましく、遅れて虎丘派の松源崇岳（一一三二―一二〇二）の松源派や、無準師範（仏鑑禅師、一一七七―一二四九）の破庵派などの系統が栄えていくことになる。これに反して、臨済宗黄龍派や雲門宗についで、曹洞の宗風もしだいに衰微して人材を欠いていくのである。

そんな中で慧暉の系統のみが宏智派の法燈を維持しており、後に元末明初まで受け継がれ、その間に東明慧日（一二七二―一三四〇）や東陵永璵（一二八五―一三六五）によって日本禅林にも導入されて真歇派の永平門下とともに日本の地に隆

盛を見ることになる。そこで最後に慧暉の法を嗣いだ門人について一通り考察してみることにしたい。[50] 慧暉の法嗣を載せる燈史としては、『続伝燈録』目録下（巻二九）に載るものがもっとも古く、それによれば、

自得暉禅師法嗣四人

雪竇徳雲禅師　仗錫崇堅禅師　華蔵慧祚禅師　雪竇煥禅師

〈已上四人無レ録〉

とあり、雪竇徳雲・仗錫崇堅・華蔵慧祚・雪竇煥という四人の法嗣の名を伝えている。これら四人はともに『普燈録』にはその名が載せられていないことから、法恭の法嗣らと同じく実際の活動は慧暉の示寂して以後のことと思われ、編者である雲門宗の雷庵正受（一一四六―一二〇八）が活動していた当時はいまだ存命中であって、正受も彼らの存在に注目することがなかったのであろう。

これに対して、『続伝燈録』以降の『続燈正統』『祖燈大統』『五燈全書』などの「目録」もほぼ同様に四人を挙げているが、その列記の順序が相違している。『続燈正統』目録（巻三五）では、

浄慈暉禅師法嗣〈暉嗣二天童覚一〉

華蔵慧祚禅師　雪竇徳雲禅師〈此後無レ伝〉　仗錫崇堅禅師

雪竇煥禅師

とあり、『祖燈大統』目録下（巻六七）でも、

浄慈暉嗣

華蔵慧祚〉　雪竇徳雲　仗錫宗堅　雪竇煥

と記され、さらに『五燈全書』目録巻五でも、

浄慈暉禅師法嗣

華蔵慧祚禅師　雪竇徳雲禅師〈以下不レ列二章次一〉　仗錫宗堅禅師　雪竇煥禅師

としてそれぞれ慧祚のみを見録（または立伝）として扱っている。後の燈史もおおむね慧祚の上堂を載せて見録者として扱い、法嗣の筆頭に名を挙げている。しかし、もっとも古い『続伝燈録』が四人をすべて無録として扱いつつも、法燈のつづいた慧祚を筆頭に載せていないことから、この順番こそ嗣法の兄弟順に並べられたものであろうと推測される。

慧暉の四〇年にも及ぶ久しい接化期間からするならば、伝えられる法嗣の名が四人なのは意外に少ないといってよい。もっとも「瑞巌石牕禅師塔銘」によれば、法弟の石窓法恭には一〇人の法嗣が存したとされるものの、実際に名の伝えられるのは浄慈中庵重皎・浄慈古巌如璧（堅璧とも）・江心忍の三人にすぎない。[51] おそらくその活動期間からして少なくとも慧暉には法恭と同じく一〇人くらいの法嗣は存したはずであり、これら四人のほかにも名の知られない法嗣が活躍していたものと推測される。

そこで以下、『続伝燈録』に載る嗣法の順に慧暉の法嗣に

ついて考察しておきたい。

雪竇山の海印徳雲

『続伝燈録』目録に慧暉の嗣法門人として最初に名が記されるのは雪竇徳雲である。徳雲に関してはその足跡がほとんど不明であるが、幸いにも『雪竇寺志略』の「歴代禅師」に「徳雲禅師〈嗣二自得暉一〉」と記され、また『雪竇寺誌』巻四上「祖系」にも、

雪竇徳雲禅師〈曹洞宗第十二世〉。師嗣二自得暉一。

と明確に慧暉の法嗣として「雪竇徳雲」の名が存している。さらに『四明山志』巻二「伽藍」の「雪竇資聖寺」にも、

徳雲・文煥、皆嗣二自得暉法一。

とあり、徳雲が文煥とともに慧暉の法を嗣いで雪竇山に化を敷いたことを伝えているものの、やはりその具体的な足跡は何ら記されていない。これらによれば、徳雲は師の慧暉が長らく化導を敷いた明州奉化県の雪竇山資聖禅寺に住したことが知られるわけである。

ちなみに雪竇山へ曹洞禅者が進出したのは、宏智下の聞庵嗣宗（宗白頭、一〇八五―一一五三）に始まっており、ついで真歇下の大休宗珏（一〇九一―一一六二）が入り、宏智下の清萃・自得慧暉・石窓法恭とつづき、慧暉の再住後に真歇派の足庵智鑑（一一〇五―一一九二）が入寺している。また、その後も石窓下の古巌如璧なども雪竇山を拠点としていたことが知られている。このように一二世紀後半から一三世紀初頭にかけては、ほぼ曹洞禅者によって雪竇山が独占維持されていた感があり、徳雲の陞住もこれを受けたものといってよい。もちろん、雪竇山の寺格からして、徳雲はそれ以前にも他の禅寺に住しているものと見られる。

徳雲の雪竇山における活動はほとんど知られないが、わずかに北宋代の雲門宗中興の祖である雪竇重顕（明覚禅師、九八〇―一〇五二）の『雪竇明覚禅師語録』を重刊していることはきわめて注目すべき事跡であろう。すなわち、五山版『雪竇明覚禅師語録』巻下の辟開に、

明覚禅師住二当山一三十余年、雷二霆諸方一。時天衣方主中痊。由レ是沖・本・秀・夫、出而盛二其道於天下一。前レ此蓋未レ聞レ有レ刊二其語一、於二山中一者、及レ是乃克為二之祖一。銭塘・福唐板本為レ優。具二透関眼一者閲レ之、可下以挹二清標於百載一啓二蟄戸於玄関一上。迺知、正法眼蔵付嘱有在。

時開禧元年仲冬、雪竇住山徳雲謹序。

という序文が伝えられている。[53] これによれば、徳雲は開禧元年（一二〇五）一一月に雪竇山の住職として『雪竇明覚禅師語録』の重刊に際して、その序文を撰していることが判明する。このことは徳雲の師である慧暉や法伯に当たる嗣宗の墓塔が重顕の明覚塔に並ぶかたちで建てられ、とくに重顕と慧

暉の塔は双塔と称せられたとされることとも無縁ではあるまい。同じ青原下として雲門宗の重顕に対する意識が、当時の雪竇山の曹洞禅者に濃厚に存したことが察せられる。もちろん、これによって徳雲が雪竇山で活動していた期間も明らかとなり、慧暉が雪竇山の明覚塔下にて示寂してより二三年後のことである。慧暉の高弟として徳雲がなした隠された業績は、当時の曹洞宗の実情を知る上でも貴重なものであろう。

ところで、楼鑰（字は大防、攻媿主人、一一三七―一二一三）の『攻媿集』巻八一「偈頌」には

游雪竇双塔、登雲簷、有懐海印雲老、
来礼二師遺像、小立雲簷、一餉、欲見徳雲比丘、却在別峯頂上。

という六言四句の偈頌が伝えられている。これは楼鑰が雪竇山の双塔に遊び、さらに雲簷の中に登って先の住職であった海印雲という禅者を偲んだ際の作である。双塔はいうまでもなく重顕と慧暉の二禅者を祀る墓塔であるから、楼鑰は二師の遺像を礼し、暫時の間、雲簷に登って佇んでいたことになろう。そして、ここにいう海印雲老こそ時代的に慧暉の法嗣である徳雲のことを指しているものと見られる。二師の遺像とは双塔に葬られた重顕と慧暉の二禅者の頂相のことを意味するものであり、おそらく墓塔の周辺に建てられた塔頭（廟所）には両者の頂相が飾られていたのであろう。

「海印雲老を懐うこと有り」とあるから、すでに徳雲が示寂して後の記事と見られ、楼鑰はかつて徳雲とも道交を結んでいたのであろう。徳雲比丘とは『華厳経』「入法界品」で善財童子が遍参した善知識の一人であり、いまは徳雲の法諱に相応して語られているわけである。

ところで、徳雲の道号が海印であったことが判明すると、『扶桑五山記』一「育王住持位次」に、

廿六、印空叟禅師。廿七、海印雲禅師。廿八、晦菴明禅師。

とある海印雲も徳雲のことを指している可能性が強い。阿育王山とは明州鄞県東五〇里に存する阿育王山広利禅寺のことであり、雪竇山や天童山と並んでこの地の名刹と知られ、後に禅宗五山の第五位に列したことで名高い。ここにいう阿育王山第二七世の「海印雲禅師」が海印徳雲のことを指すのであれば、徳雲は雪竇山についで阿育王山広利禅寺にも陞住していることになろう。

これによれば、徳雲は大慧派の拙庵徳光の法嗣である空叟宗印と、やはり大慧派の木庵安永（?―一一七三）の法嗣である晦翁悟明（晦庵とも）との間に阿育王山に入寺していることになろう。この点、『明州阿育王山志』（続志）巻一六「先覚攷〈補遺〉」では、

第二十七代、空叟印禅師〈西蜀人、嗣仏照光公、六月初三日忌〉

第二十八代、海印空禅師〈十一月十九日忌〉
第二十九代、晦菴明禅師〈嗣二鼓山永公一、五月十一日忌〉

と記され、一代のずれが見られるほか、海印雲ではなく海印空となっている。いずれにせよ、慧暉の法嗣として阿育王山にまで住した禅者が存したらしいことが窺われ、その忌日も某年の一一月一九日であったことが記されている。(54)

阿育王山に住したことの知られる曹洞禅者としては、真歇清了が第一三世（または第一四世）に住し、正覚の法嗣である了黙が第一八世（または第一九世）に住しているらしいことが知られ、また後に慧祚の法嗣である東谷妙光（？―一二五三）が第三九世（または第四一世）に住したことが知られているのみであったが、ここに慧暉の法嗣である徳雲が新たに第二七世（または第二八世）に住している事実が判明したわけであり、合わせて四禅者の住山歴住が確かめられたことになる。

ただ、先の『攻媿集』の記事などからして、徳雲は雪竇山の双塔にて示寂しているものと見られる。おそらくは阿育王山の住持期間も短期に限られていたはずであり、師の慧暉がそうであったように、晩年は雪竇山中に隠閑退居して終焉の計をなしたのではなかろうか。しかも徳雲が示寂した時期は、先の開禧元年より楼鑰が逝去する嘉定六年（一二一三）までの間に限定されることになろう。

仗錫山の崇堅

つぎの仗錫崇堅に関しても、まったくその足跡が定かでない。ただ、『続伝燈録』「目録」では徳雲に次いで第二位にその名が挙げられていることから、慧祚よりは法兄に当たるものと見られる。『五燈全書』目録では「宗堅」とあるが、いまは他の諸史料から崇堅を正式の法諱としておきたい。

『四明山志』巻二「伽藍」の「仗錫延勝寺」には、

崇堅、嗣二法自得暉一。淳熙間、曽主二仗錫一。

とあり、崇堅が慧暉に嗣法した後、淳熙年間（一一七四―一一八九）に四明の仗錫山延勝禅寺に住持したことを伝えている。ただ、慧暉の法嗣の活動期間はいま少し後のことと見られるから、崇堅が仮に淳熙年間に仗錫山に入山したとしても、それは慧暉が示寂して以降のかなり末年に至ってのことと見てよかろう。(55)

ところで、崇堅の住した仗錫とは明州鄞県西南一二〇里に存した仗錫山延聖禅院のことであり、『宝慶四明志』巻一三「鄞県志」の「寺院〈禅院〉」には、

仗錫山延聖院、県西南一百二十里。唐龍紀元年建。皇朝宝元二年賜レ額。常住田五百五十六畝。山二万二千畝。

とあるから、崇堅の住山当時、かなりの寺産を有する明州の四明山中に存した名刹の一つであったことが知られ、後に延

勝院と改められている。しかも仗錫山は雪竇山資聖禅寺やさらに四明山中に存した梨洲禅寺とともに四明山洞天の麓の三僧刹と称せられたとされ、四明の諸山でも仗錫山は高絶をもって聞こえたらしく、所有の山二二〇〇〇畝というのにもそのことが察せられる。

しかも仗錫山には崇堅に先立って正覚の高弟である大洪法為が随州（湖北省）の大洪山保寿禅院や鄞県の天童山景徳禅寺（第一七世）に化導を敷く以前にすでに住持していた因縁が存しており[56]、法為は崇堅にとって法伯に当たっていることから、そうした縁故でこの寺に入院しているものとも見られる。したがって、崇堅もまた四明の地に余勢を残す宏智派の一役を担っていたわけであり、曹洞禅者としては後に真歇派の足庵智鑑の法嗣である棘林杷（？―一二五八）も仗錫山に住している。

華蔵寺の明極慧祚

つぎに後代に受け継がれる明極慧祚に関して見てみよう。この人は道号を明極、法諱を慧祚と称しているが、慧祚の名が慧暉による命名であったのかどうかも定かでない。慧祚は東福円爾将来の『宗派図』に「自得暉」の法嗣として、ただ一人のみ「明極祚」として名が挙げられており、当時、すでに慧暉の嫡嗣として位置づけられていたものと見られ、盛んに慧暉の門風を振っていたことが察せられる。門流が後代に展開している点で重要な祖師ではあるが、その足跡に関してはほとんど不明といってよい。

『続伝燈録』目録に慧暉の法嗣として第三番目に名が挙げられていることから、慧祚は慧暉にとって比較的晩年の法嗣であったものと推測される。

わずかに慧祚に関しては、早くに南宋末期の大慧派の枯崖円悟の『枯崖和尚漫録』巻上に、

> 常州華蔵明極祚禅師、嗣二暉自得一。（中略）明極以二大父一事二宏智一。拈提如二山濤論一兵、闔合二孫呉一、亦可レ為二叢林榜様一。

という記事が載せられている。これによれば、慧祚は慧暉に法を嗣いだものの、つねに師翁の宏智正覚を大父として尊崇し、きわめて厳格な宗風を振ったものらしい[57]。ただ、慧祚の法嗣らの活動時期からして、慧祚その人は正覚に直接に相見する機会は存しなかったものと見られる。

ところで慧作は他の慧暉の法嗣がほとんど明州の地で化導を敷いたのに対して、一人この地を離れて活動している点で特徴的であろう。すなわち、慧祚が住したのは常州（江蘇省）無錫県西三六里に存した華蔵褒忠毘陵顕報禅寺すなわち華蔵寺であり、この寺は後に禅宗甲刹の一つに列している。かつて真歇派の如浄も嘉定三年（一二一〇）に華蔵寺にて建康府（南京）の石頭山清涼禅寺への住持任命の請状を受けてお

り、慧祚の法嗣である東谷妙光も後に華蔵寺に住している。

慧祚の言句としては、先の『枯崖和尚漫録』巻上に、

嘗挙二保寿開堂語一、拈云、保寿開堂為レ衆竭レ力、三聖推出故園春色。保寿便打可レ知レ礼也。瞎二却鎮州一城人眼一、三聖重重露二肝胆一。保寿下レ座、便帰二方丈一。千古叢林為二榜様一。喝云、喚作二榜様一得麼。

という上堂語が伝えられている。これは唐末の臨済義玄の高弟である保寿沼（宝寿とも）の門人の保寿二世和尚の開堂に際して、臨済下の法叔である三聖慧然が一僧を推出した「三聖推出一僧」の古則公案に対する拈提にほかならない。わずかな語句ながら、慧祚の接化の一端を知る上では古く貴重なものであろう。

さらに『五燈会元続略』巻一上「嘗州華蔵寺明極慧祚禅師」の章や『五燈全書』巻三〇「嘗州華蔵寺明極慧祚禅師」の章などに至ると、ようやくつぎのごとき慧祚の一頌を伝えている。すなわち、それは、

頌下洞山喫二果子一話上曰、洞山果子誰無レ分、掇二退台盤一妙転レ機。
今夜為レ君軽点破、牡丹花下睡二猫児一。

というものであり、唐末の洞山良价と泰首座（石霜下の南岳玄泰）との「洞山果子」の古則公案にちなむ偈頌である。なお、この慧祚の頌古は『禅宗頌古聯珠通集』巻二四の「洞山果子」の古則にも採録せられている。今日、慧祚の語句として知られるのは、この二種の古則の拈提・頌古のみにすぎない。

また慧祚が真歇派の如浄とも関わっていた事実を伝えるものとして、『如浄和尚語録』「偈頌」には、

送二僧見二明極和尚一
機糸抽尽万縁平、休倚二寒巌一転二路程一。千聖不レ携無影像、那辺借レ伴月華明。

という偈頌が存している。これは如浄の席下に在った一僧が慧祚の下に参見せんと出かけるのに際して、如浄が与えた偈頌である。一僧を挟んでの因縁ではあるが、如浄・慧祚の両者の間にかなりの交流があったらしいことが窺われる。[58] すでに述べたごとく如浄は若くして雪竇山の慧暉に参学した可能性が高く、慧祚との交流もこのときに始まるものかも知れない。慧祚は如浄よりは幾分か年配であったはずであるが、活動期間はほぼ如浄と同時代であったということになろう。

慧祚の法嗣としては、わずかに承天短蓬遠（遠鉄橛、？―一二四七）・霊隠東谷妙光・雪竇瑞の三人の名が知られるのみであるが、妙光の系統がその後の宏智派を維持していくことになる。

雪竇山の文煥

この人に関しては燈史では単に雪竇煥としてしか伝えられ

ていないが、『雪竇寺志略』「歴代禅師」に「文煥禅師〈嗣二自得暉一〉」とあり、『雪竇寺誌』巻四上「祖系」にも、

雪竇煥禅師〈曹洞宗第十二世〉。師嗣二自得暉一。

と記されており、さらに同じ「祖系」の「自得慧暉禅師」の章においても、

其法嗣、華蔵慧祚・雪竇徳雲・仗錫崇堅・雪竇文煥四人。

とあって、やはり明確に慧暉の法嗣として「雪竇文煥」とその名を記されている。『四明山志』巻二「伽藍」の「雪竇資聖寺」にも、

徳雲・文煥、皆嗣二自得暉法一。

とあり、徳雲とともに文煥も慧暉の法を嗣いで雪竇山に化を敷いたことを伝えているが、その具体的な足跡は何ら記されていない。

これらによって雪竇煥の法諱が具体的に「文煥」であったことを知ることができ、『続伝燈録』や『五燈全書』など燈史はいずれも慧暉の法嗣の中で最後にその名を挙げていることから、文煥は慧暉の晩年近くの門人であったものと推測される。おそらく法兄の徳雲の後席を継いで雪竇山に住したのであろうが、先の徳雲と同じく雪竇山に住する以前には他の禅寺の住持を歴任して来ているはずである。

ところで、雪竇山の文煥といえば臨済宗虎丘派(松源派)の虚堂智愚(一一八五―一二六九)が最初に参学した禅僧として名高い。智愚は門下に日本の南浦紹明(大応国師、一二三五―一三〇八)を得て後代の日本臨済宗の源流となった祖師であるが、『虚堂和尚語録』巻末に付される法嗣の閑極法雲が撰した「行状」には、

首依二雪竇煥和尚・浄慈中庵皎和尚一、公務外惟坐禅。二老撫愛、常置二之左右一。

という記事が見い出せる。これによって、雪竇山の文煥が若き智愚に公務のほかはただ坐禅をさせ、常に左右に置いて親しく指導したことが知られる。[59] こうした坐禅を重んじる姿勢は師の慧暉の禅風を直接に受けるものであろう。

このとき智愚はいまだ受具する以前のことであり、わずかに郷里明州象山県の普明律院から禅門に投じた直接のことである。いま一人の参学の師である浄慈寺の中庵重皎がやはり慧暉の法弟に当たる石窓法恭の法嗣であることから、宏智派の文煥・重皎の二人が若き智愚に与えた影響は存外に大きかったのではなかろうか。ただ、重皎が中庵と号したのに対して、文煥には道号が付されていないことから、如浄などと同様にいまだ道号を使用することはなかったものと見られる。

ちなみに『雪竇寺誌』巻四下「祖系」の末尾には、各宗の雪竇山の住山者を記して、

曹洞宗之主二雪竇一也、自二聞菴嗣宗禅師一始、宗嗣二天童覚一、為二洞山价十一世孫一。自得暉禅師・糍禅師、俱嗣レ覚。鑑禅師、嗣二

真歇了。皆為二价十一世孫。智鑑禅師、嗣二天童珏。徳雲禅師・
煥禅師、俱嗣レ暉、為二价十二世孫。無印証禅師、嗣二天童岫一、
為二暉六世孫・价十六世孫。共計二八人一。

と記されている。これには真歇派の大休宗珏のほか、先の石窓法恭やその法嗣の古巌如璧など実際に雪竇山に住持していながら名が載せられていない曹洞禅者も存するものの、宏智下の聞庵嗣宗が入寺して以来、当時の曹洞禅者で雪竇山にて活動した人々の足跡が大まかにまとめられており、徳雲と文煥もその一役を担っていたことが記されている。

石霜山の明総

ところで燈史にはまったく記されていないが、いまひとり慧暉の門人と目される人に石霜明総という禅者の可能性が指摘されている。すなわち、慧暉の語録とされる『霊竺浄慈自得禅師録』六巻の中で巻一から巻三までの上堂の部分には、「石霜明総禅師下語寄言」として「石霜総曰」の下語が各上堂の後に付されている。この語録は慧暉の浄慈寺時代の上堂語その他を収録したものとされており、後代の中世の日本曹洞教団において大いに参究せられ、その抄物もいくつか伝えられている。

ただ、『雲竺浄慈自得禅師録』の巻末に「塔銘曰」として、紹興二九年（一一五九）除月（陰暦の一二月）一五日の日付で「住瑞巌法弟比丘石窓洪恭謹撰」の名の下に掲載される慧暉の塔銘は、実際はまったくの偽撰であることが知られており、この語録自体の伝承もきわめて曖昧なものとなっている。したがって、明総についても果たして実在した人であったのか否かは不明といってよい。

しかも『霊竺浄慈自得禅師録』巻六に付録される慧暉の「塔銘」には、

法嗣之出世人一十三人也、石霜総・東谷光等為レ首、会下雲衆七百余員也。

と記され、明総は東谷妙光とともに慧暉の法嗣の首位として名が挙げられている。しかしながら、妙光はいうまでもなく明極慧祚の法嗣であり、慧暉にとっては法孫に当たる人であるから、明総の場合も慧暉の法嗣と断定することはできないであろう。ただ、『雲竺浄慈自得禅師録』のいま一人の編者とされている簪谿老人（潛渓とも）了広も実際に慧暉の門流に属する東谷妙光の法嗣であることから、妙光・了広などとともに明総も慧暉の法嗣か否かはともかくとして、やはり慧暉の門流に属する宏智派の実在の人であった可能性も十分に認められよう。

ところで明総の住持地として記される「石霜」とは、明らかに潭州（湖南省）瀏陽県西南八〇里の石霜山崇勝禅寺を指しているわけであり、遥か湖南の石霜山との関わりを伝えてい

る点では特異なものがあろう。[60] 仮に明総の存在が定かであれば、慧暉の法嗣または門流として遠く湖南の地に活動した禅者が存したことになるからである。

おわりに

以上、宏智正覚の高弟である自得慧暉に関して、その行実と禅風を一通り窺って見たわけであるが、慧暉はまさに師の正覚亡き後、宏智派の禅風を維持せんとした中心的な祖師であったといってよい。慧暉が宏智派の中心と成り得たのは、法兄の聞庵嗣宗らが早くに示寂した後、法弟の石窓法恭とともに八〇歳を越える長命を保ち得たことにもよろうが、慧暉に関する資料を見るに、しだいに衰微していく宏智禅の孤塁を必死に守らんとしたこと、また学仏道に対する真摯な姿勢によるところが大きかったことが改めて窺える。

しかも慧暉ははじめ祖照道和に雲門宗の流れを学んだが、その後は、真歇清了や正覚に就いて曹洞宗旨を究めている。慧暉が坐禅辦道をとりわけ重視し、正覚の禅の持つ黙照的な香りを継承していることは、残される僅かな上堂・示衆などからも十分に知ることができよう。また慧暉は曹洞宗旨を示す「正偏五位」などを積極的に採用しつつ、「五転位」その他の機関を独自に考案していることも見逃せない。

しかしながら、その禅風の特色としてとくに注目すべきは、禅の修証の深まりを段階的に示す『六牛図』を著わしたことではなかろうか。この『六牛図』は「正偏五位説」のような格調の高い宗旨を語るものというより、牧牛に托して体系的に学人に修証の指針を示すのが目的で書かれており、そうした面は師の正覚の禅にはあまり見られなかった特徴であろう。そこに細かな段階禅をほとんど説かなかった宋代曹洞宗における慧暉の特異性が現われており、懇切丁寧な学人接化のさまを見ることができる。

また慧暉は叢林の規矩をきわめて重視した禅者であって、当時の江南禅林の弊風をはなはだ憂いたらしい。こうした修行・行持の面でも慧暉が実際に学人の日々のありかたを重視し、具体的に禅を説こうとする立場を貫いたことが知られる。このように宏智禅の孤高さをそのまま受け継ぐのではなく、少し流れを変えてより事相の面を強調しているところに、慧暉の接化の特徴が偲ばれるわけである。

慧暉の門流は他の宏智門下がすべて断絶していく中で辛うじて後代へと受け継がれ、元末明初まで中国禅宗史の流れに曹洞黙照の色彩りをなし、さらに日本に導入されて鎌倉・京都の五山派の中で唯一の曹洞系として一異彩を放つことができたのである。後代の門流をも意識に入れた慧暉の指導がその背景にあったことを知るべきであろう。

今後、「自得暉禅師塔銘」などの史料が発見されることで

もあれば、慧暉の消息がより詳細に知られるとともに、さらに正覚の示寂して以降における江南の曹洞宗の実態もより鮮明にされるはずであろう。(61)

註

(1) いま、慧暉の『霊竺浄慈自得禅師録』の上堂を項目のみで列記してみるなら、およそつぎのごとくなる。はじめに巻首に「住霊隠伝祖比丘東谷妙光謹而叙」という東谷妙光の序文、および「胡文状書秘読序四十八章図」を収めている。巻一には「歳旦上堂」「同小参」「正月十五日上堂」「同小参」「二月朔日上堂」「同小参」「二月望日仏涅槃上堂」「同小参」「三月旦上堂」「同小参」「三月望日上堂」「同小参」「四月一日上堂」「同小参」「四月安居結夏上堂」「同小参」「五月初一日上堂」「同小参」「五月半蟾上堂」「同小参」「六月安居半夏上堂」「同小参」「六月三五上堂」「同小参」「七月日出上堂」「同小参」「七月安居解夏上堂」「同小参」「八月吉日上堂」「同小参」「八月半旬上堂」「同小参」「九月初日上堂」「同小参」「九月十五日上堂」「同小参」「十月開爐上堂」「同小参」「十月安居結冬上堂」「同小参」「十一月朔旦上堂」「同小参」「十一月半望上堂」「同小参」「十二月朔吉上堂」「同小参」「十二月望辰上堂」「同小参」「歳末上堂」「同小参」を収めており、ただ順序よく一年間の上堂と小参がまとめられていることが判明する。また巻二には「上堂」として三〇回の上堂を収め、巻三にも三〇回の「上堂」を収めるが、とくにその末尾の方の三上堂では芙蓉道楷の四偈、宏智正覚の五転位、洞山良价の正偏五位などに関するそれぞれの慧暉の偈頌を載せている。さらに巻四には二〇回に及ぶ「示衆」を収めている。ついで巻五には「天童宏智禅師」「径山了和尚」「大洪顕和尚」「石門聡和尚」「雲居西和尚」「蔣山照和尚」「法雲仙和尚」「夾山勤和尚」「雪峯如和尚」「霊隠性和尚」「育王禅和尚」「金山青和尚」「雲蓋霊和尚」「開福寧和尚」「大慈翌和尚」「百丈明和尚」「天台慈和尚」「五臺文殊（院主）」「峨眉普賢（院主）」「補陀岩観音（院主）」「一庵主」「峯庵主」「瑩庵主」「義庵主」「棲庵主」という二五禅者との問答商量を伝えている。そして巻六には「育王万庵和尚下火」「天童古泉和尚下火」「浄慈妙正和尚下火」「蔣山奇伝和尚下火」「芙蓉傑和尚下火」「玄本首座下火」「了照首座下火」「霊仙首座下火」「祐密首座下火」「法真首座下火」「慶宝書記下火」「妙用書記下火」「梵言蔵主下火」「慧明蔵主下火」「宗仙菴主下火」「法遵菴主下火」「洞真知客下火」「宗麟侍者下火」「清信監寺下火」「理証典座下火」「臨安府王常侍玉田居士下火」「興陽府尚書敏聡林居士下火」「明州太守刑仙相国祐普居士下火」という二三人の道俗に対する下火を収め、石霜明総に与えた「自賛」を載せている。その後に「住瑞巌法弟比丘石窓洪恭謹撰、紹興二十九年除月十五日馳筆書」と記される「塔銘」を載せて全体がまとめられている。

(2) 当時の曹洞下における坐禅観については、『宏智禅師語録』「明州天童山覚和尚偈頌箴銘」に載る宏智正覚の「坐禅箴」や「黙照銘」に示されている。

(3) 『枯崖和尚漫録』巻中「短蓬遠禅師」には、

短蓬遠禅師、平生不レ設二臥具一、昼夜枯坐、得二遠鉄橛之称一。

とあり、慧暉の危坐に類した枯坐という表現が見られ、慧暉の法孫に当る短蓬遠が徹底した只管打坐を行じて世人から遠鉄橛の尊称を得たことを伝えている。

(4) 『正法眼蔵』「行持」や『伝光録』の如浄章によれば、如浄は一九歳で禅門に投じてより徹底した坐禅を重んじたと

される。

(5)『霊竺浄慈自得禅師録』巻三「上堂」にも、「上堂。因曰、記得、新豊禅師有二五位一、正中偏・偏中正・正中来・兼中至・兼中到。諸禅徳、試辨看。乱二位次一不レ得、謬二言句一不レ得。老叟有二卑頌一、大衆如何商量。乃有レ頌曰」として、慧暉のこの五位頌を載せている。

(6)宏智正覚の五位については『宏智禅師語録』「明州天童山覚和尚偈頌箴銘」の「偈頌」の部分に「五位」として「正中偏」「偏中正」「正中来」「兼中至」「兼中到」という「正偏五位」それぞれの偈頌が載せられており、さらに「王子五位」(五王子)についても偈頌が存しているなど、多くの機関を頌賛している。

(7)ほかに当時の宏智派の曹洞禅者の五位頌としては、『人天眼目』巻三に宏智覚と翠巌宗(嗣宗)の偏正五位の「問答」と、翠巌宗の「功勲問答」と、善権智(法智)の「五位王子頌」を収めている。

(8)門風偈に関しては『続古尊宿語要』巻二「芙蓉楷禅師語」の「偈頌」に、それぞれ「妙唱不レ干レ舌」「死蛇驚出レ草」「解レ針枯骨吟」「鉄鋸和二三臺一」の語と、それに対する七言四句ないし五言四句の偈頌を載せている。また『嘉泰普燈録』巻二九「芙蓉楷禅師五首」にも「妙唱非レ干レ舌」「死蛇驚出レ艸」「解レ鍼二枯骨一吟」「鉄鋸舞二三臺一」および「古今無間」という五首の偈頌を載せている。

(9)『霊竺浄慈自得禅師録』巻三「上堂」にも「上堂。因曰、記得、芙蓉和尚道、妙唱不レ干レ舌、死蛇驚出レ草、解針枯骨吟、鉄鋸舞二三臺一。諸禅徳、這箇四転語、如何商量。(中略)老僧又有二四偈一。乃有レ頌曰」として慧暉の「門風偈」の偈頌を載せている。

(10)『霊竺浄慈自得禅師録』巻三「上堂」には、

上堂。因曰、記得、先師宏智和尚有二五転位一。匣裡青蛇吼、金針去復来、秦宮照レ瞻寒、五天銀燭輝、深岩蔵二白額一。諸禅徳、如何商量。老僧便有二五偈一。乃有レ頌曰(後略)。

とあり、以下、慧暉の「五転位」の偈頌を載せている。したがって、これによれば、慧暉の五転位は「宏智和尚五転位」に因んでいることになり、その立題の古徳とは師の正覚を指すことになろう。

(11)宏智正覚の「五転位」は残念ながら『宏智禅師語録』には収められていない。

(12)『禅林宝訓』(『禅門宝訓』とも)は参禅学道に策励となるべき訓誡垂示を東呉(蘇州)の浄善が淳熙年間にまとめたものであり、慧暉の存命中か示寂直後の成立であったと見られる。

(13)簡堂行機については、『嘉泰普燈録』巻二〇に「護国此庵景元禅師法嗣」として「台州国清簡堂行機禅師」の章が存し、高宗皇帝のためになした陞座などが収められている。注目すべきは、その参学中の消息として、

年二十五、棄二妻拏一、往二顕慶寺一、円顱受具。乃依二国清光禅師一、去游二諸席一、晩契二証於此庵一。

という記事が存することである。これによれば、行機は紹興三七年(一一三七)に二五歳で妻を棄てて出家しているが、その後、天台山国清寺の光禅師に学んだとされる。この光禅師とは時期的に見て、当時、国清寺に住していたと見られる烏巨正光のことを指しているものと推測される。正光は宏智正覚の法嗣のひとりであり、慧暉にとっては同門の法兄弟に当っている。正光ははじめ俗名を呉叙(字は元常)といい、宰相の呉敏(字は元中、中橋居士、一〇八九―一一三二)の弟でありながら、官位や妻子を棄てて出家し、正覚に従って曹洞宗旨を究めた人であり、台州(浙江省)の天台山国清寺や衢州(浙江省)の烏巨山乾明寺な

どに住している。おそらく行機は出家に至る境遇が近似していた正光に親近感を覚え、その縁故などから慧暉とも関わりを持つに至ったのであろう。行機はやはり晩年は天台山の万年寺や国清寺に住しており、この間に慧暉とも相見したものと見られる。

(14) 尤袤（字は延之、一一二四―一一九三）は常州（江蘇省）無錫の出身であり、尤時亨（字は雲耕）の子で、自ら遂初居士と号している。紹興一八年（一一四八）の進士として、太常少卿に累進し、婺州（浙江省）や太平州（安徽省）の知府を歴任して後、給事中・礼部尚書に昇進している。紹熙四年の秋に世寿七〇歳で没しており、文簡と諡されている。著に『遂初小稿』六〇巻や『内外制』三〇巻が存したとされるが、現今には伝えられておらず、わずかに『梁谿遺稿』二巻と『遂書堂書目』一巻を残すのみである。ただし、『梁谿遺稿』には残念ながら慧暉に関するような記述は載せられていない。

(15) 尤袤と禅宗との関わりについて触れるなら、『禅林宝訓』巻四によれば、侍郎の尤袤が楊岐派の水庵師一にも参じて方外の交をなしたとされており、また『叢林盛事』巻上「尤延之侍郎」の項においても、

尤延之侍郎、於二宗門一甚注レ意。初自二郎中一出守二台州一、朝覲次、孝宗忽問曰、卿去二南台一、地里図中有二何勝概一。尤秦曰、国清・万年。孝宗大喜、又戯問曰、朕聞方広有二五百応真大士一、元来是強人、忽然一時出現、卿以二何法一治レ之。尤不レ覚竪二起拳頭一云、臣有二金剛王宝剣一。孝宗喜動二天顔一。尤既至レ台、以二寛慈一御レ民、民甚愛レ之。但南台旱潦易レ得。尤嘗作レ詩曰、来雨一朝成二汗漫一、纔晴三日人憂レ乾、向来尽道天難レ做、天到二台州一分外難。然黄堂政暇、多過二報恩一、与二仏照一論レ道。仏照後赴二冷泉之請一、継請二伊菴権一住持、衆常四五百。

とあり、尤袤が孝宗の前で天台山の国清寺・万年寺のことや方広寺の石橋（石梁瀑布）の五百羅漢のことなどを題材にした問答をなしている。また台州臨海県の巾子山報恩光孝禅寺の住持であった拙庵徳光や、師一と同門の無庵法全の法嗣である伊庵有権とも交流を持っていたことが判明する。さらにいま一つ注目すべきは、尤袤の孫に当たる尤焴（字は伯晦、一一九〇―一二七二）が、慧暉の法孫に当たる東谷妙光と親しい道交をなしていることであろう。この点は拙稿「南宋末曹洞禅僧列伝(下)」（『駒沢大学仏教学部研究紀要』第五〇号）の「東谷妙光」の項を参照。

(16) 後の日本禅林のことながら、臨済宗大鑑派の天鏡霊致（一三〇一―一三八一）が『無規矩』巻乾「霊亀山天龍資聖禅寺語録」において、

上堂。拳、自得和尚云、大智禅師、特剏二清規一、扶二救末法比丘不正之弊一、由レ是前賢遵承、拳拳奉行、有二教化一有二条理一有二始終一。天龍一衆、咸遵二国師之規一、能救二末法之弊一。千金裘非二一狐之腋一、大厦材非二一木之枝一、庶幾祖室光華、盛二于今日一。拍レ膝云、少林春色、五葉一花、曹渓水流、千枝万派。

という上堂を残しており、日本の五山叢林においてもこの慧暉の語を引用している事例が存している。

(17) 或庵師体についても、『嘉泰普燈録』巻二〇に「護国此庵景元禅師法嗣」として「鎮江府焦山或庵師体禅師」の章が、『南宋元明禅林僧宝伝』巻二に「或菴体禅師」の章がそれぞれ存し、また『続古尊宿語要』巻六には「或菴体禅師語」を収めている。

(18) 大洪報恩の戒律観については、『湖北金石志』巻一〇「随州大洪恩禅師塔銘」に、

既遐振二宗風一、而自持二戒律一甚厳、終身壊衣、略不レ加レ飾。（中略）有二語録三巻一、集二曹洞宗派録三巻・授菩提

心戒文一巻・落髪受戒儀文一巻一、並伝二於世一。

とあり、持律堅固であったこととともに、『大洪恩禅師語録』三巻と『曹洞宗派録』三巻と『授菩提心戒文』一巻および『落髪受戒儀文』一巻がそれぞれ存したことが知られるから、かなり曹洞宗の規矩面での充実に尽力した人であったことになろう。

(19) 大洪守遂の『潙山警策註』については、「潙山警策、大洪嗣祖沙門守遂註」としてその全文が存しており、左朝奉大夫新広南東路転運判官の張銖が紹興九年（一一三九）一二月に「注潙山警策序」を撰している。また至元二三年（一二八六）に臨済宗楊岐派の蒙山徳異（牧叟、一二三一―？）が記した跋文に、

宣和間、又得二遂禅師直注一深義一、初学易通レ妙矣哉。自レ此、有レ志二於直一者、省レ力甚多、不レ懐レ香而見二仏祖一、不レ動レ歩而登二覚場一。

と述べられることから、守遂が注を付したのは宣和年間（一一一九―一一二五）のことであったらしい。

(20) 『紹興府志』や『上虞県志』などの編纂の時点まで、慧暉の原本ではないにしても『六牛図』が図・頌ともに単独の禅籍として残っていたのであれば貴重であろう。

(21) 『禅門諸祖師偈頌』は上巻（巻一・二）が五峰子昇、下巻（巻三・四）が五峰如祐の録であるが、両者ともその足跡は定かでない。ただ、もっとも新しい「枯禅辞住二鼓山一」の作が、如浄などと同時代の虎丘派の枯禅自鏡のものであることから、その編集は慧暉の示寂後数一〇年頃すなわち南宋中末期になされたものと推測される。

(22) ちなみに『五家正宗賛』巻四「自得暉禅師」には、紹曇の賛としても「正偏兼到、十洲花寧免二凋残一、収放未レ全、六牛図有二何奇特一」とあり、「正偏五位」とともに「六牛図」が重んじられている。『五家正宗賛』は紹曇が宝祐二年（一二五四）に自序を撰し、その後、友雲塔所の守塔比丘小師居涇が乳峰（阿育王山）にて謹書したものである。したがって、南宋末期には慧暉の「六牛図」が江南禅林に好まれていたことになろう。

(23) 『禅の語録』一六「信心銘・証道歌・十牛図・坐禅儀」の柳田聖山「解説」による。ちなみに「十牛図序」には、

問有二清居禅師一、観二衆生之根器一、応レ病施レ方、作二牧牛一以為レ図、随レ機設レ教。

とあり、清居皓昇が衆生の根器を観て、病に応じて方を施し、牧牛を用いて図を作り、機に随って教えを設けたとしている。また金末元初の万松行秀（一一六六―一二四六）の『従容録』巻二「第三十二則仰山心境」の評唱には、

不レ見、清居皓昇禅師牧牛図至二第六章一云、信位漸熟、邪境覚レ疎、雖レ弁二浄穢一、如二剣利泥一、猶存二鼻索一、未レ可レ憑レ信、故白黒相半。頌曰、野牧雖レ云レ久、牽レ縄手漸離、行持非二暗昧一、進習不二依随一、浄地于于楽、長鞭毎毎持、青山香草細、一味日充レ飢。至二十二章一、人位本空、身心無レ著、得失浄尽、玄玄道路、邈無二分別一。向上一句、擬議即堕。頌曰、妄起労二看牧一、牛非人亦非、正中忘二想像一、向上有二玄微一、大海纎塵起、洪鑪片雪飛、相逢求二解会一、不レ堕二汝心機一。

とあり、行秀が明確に同じ洞山系の清居皓昇の『十二牛図』を目の当たりにしていたことが知られ、その第六章と第十二章の前書きと頌を挙げている。さらに同じ行秀は『請益録』巻下「第六十則南泉水牯」の評唱においても、「南泉水牯牛」「懶安白牯」「石鞏牧牛」などの古則を挙げて後に、

清居皓昇禅師、頌二牧牛図一十二章一。太白山普明禅師、頌二牧牛図十章一。仏国惟白禅師、頌二牧牛図八章一。昇・明二師等、皆変レ黒為レ白。惟仏印四章、全白復レ黒。

として諸禅者の牧牛図について触れていることから、当時、清居皓昇らの著わしたいくつかの牧牛図頌が流行していたものと推測される。そして、江南に在ったとはいえ、慧暉もまた皓昇の『十二牛図』の内容を十分に知っていたはずであり、これを半分に縮めたかたちで独自の『六牛図』を残したものと推測される。

(24) 廓庵師遠は合川（甘粛省）の魯氏の出身で、楊岐派の南堂元静（一〇六五―一一三五）の法を嗣いで朗州（湖南省）常徳府武陵県北三〇里の梁山観音禅院に住している。その後、師遠の『十牛図』は慧暉の『六牛図』を遥かに凌駕して愛好され、とくに日本禅林に広く流布している。

(25) このほか『普燈録』巻二九「虎丘雪庭浄禅師」の章には、圜悟克勤の法嗣で蘇州（江蘇省）呉県の虎丘山雲巌禅寺に住した雪庭元浄が図頌を付した「四牛図」の全文を伝えている。元浄もほぼ慧暉と同世代の人である。

(26) 『六牛図』に関する講話としては、わずかに柴山全慶著・広畠鋤花画の『六牛図講話』（花園文庫第5集）が伝えられるにすぎない。ここに示したまとめ方はほぼこの講話本の分類に従っている。また西谷啓治・柳田聖山編『禅家語録Ⅱ』（筑摩書房、世界古典文学全集）の「禅籍解題」によれば、

六牛図　一篇　『禅門諸祖師偈頌』三

宏智正覚に嗣ぐ自得慧暉（一〇九〇―一一五九）の作。修行の過程を、起信、初入、未純、真心、双忘、遊戯の六段階に分け、黒牛が次第に白変するに譬えて説く。柴山全慶の『禅宗十牛図』、および〝THE SIX OX HERDING PICTURES〟1965にコメントがある。

という解説を付している。慧暉の生没年を語録付載の「塔銘」に依っているのは問題であるが、今日における『六牛図』の評価を伝えている点で注目される。

(27) 廓庵師遠の『十牛図』では、「尋牛」「見跡」「見牛」「得牛」「牧牛」「騎牛帰家」「忘牛存人」「人牛俱忘」「返本還源」「入鄽垂手」という一〇段階になっている。

(28) この点、『人天眼目』巻三や『洞上古轍』巻上がこの慧暉の『六牛図』について何ら触れていないのは不可解である。もっとも廓庵師遠の『十牛図』なども『人天眼目』巻一・巻二の「臨済宗」に載せられていないことから、あるいは「四賓主」や「正偏五位」などの臨済・曹洞の宗旨とは異質なため、これらを収録しなかったのかも知れない。長慶大安に関する近年の研究としては、石井修道「潙山教団の動向について―福州大安の「真身記」の紹介に因んで―」（『印度学仏教学研究』第四〇巻第一号）を参照。ちなみに『聯燈会要』巻七「福州長慶大安禅師」の章には、

問二百丈一、学人欲レ識レ仏、何者是仏。丈云、大似二騎レ牛覓一レ牛。師云、識後如何。丈云、如二人騎レ牛到一レ家。師云、如何保任。丈云、如二牧牛人執レ杖視一レ之、不レ令レ犯二人苗稼一。師於二言下一領レ旨。

(29) という百丈懐海（大智禅師、七四九―八一四）と大安との問答も載せられている。このほか、『聯燈会要』巻五「憮州石鞏慧蔵禅師」の章にも、

師在二厨下一作務。祖問、作二甚麼一。云、牧レ牛。祖云、作麼生牧。云、一回入レ草去、驀鼻拽将来。祖云、子真牧レ牛也。

(30) という馬祖道一（七〇九―七八八）と法嗣の石鞏慧蔵との牧牛の問答を伝えており、ここでは牧牛が身心を鍛練する修行の意に解されている。

雲外雲岫については、拙稿「元代曹洞禅僧列伝(上)―天童山の雲外雲岫について―」（『駒沢大学仏教学部論集』第二三号）を参照。

(31)『浄慈寺志』巻一二「塔院」などにも、慧暉の墓塔が浄慈寺に存在した事実をまったく伝えていないが、慧暉晩年の浄慈寺での活動をふまえれば、浄慈寺に墓塔が立石されても何ら不自然ではない。おそらく後代には浄慈寺の墓塔が煙滅して、すでにその所在すら知られなかったのであろう。

(32)柴山全慶『六牛図講話』の「六牛図頌解題」の「八、書誌」には、

大正一四年、広谷国書刊行会から出版せられた「近世仏教集説」中に、橋染子の著「故紙録」なる小品が輯録せられており、この中に狩野探雪の六牛図に、東京、中野、龍興寺三世、雪巌和尚の賛を願ったことが記されています。

とあり、慧暉の『六牛図』が日本にても画の題材となっていたことが知られる。実際、『近世仏教集説』に収録される橋染子（霊樹院、一六六七―一七〇五）の『故紙録』下（二九九頁b～三〇〇頁b）には

一、一日、将公ニ六牛図ヲ賜ハンコトヲ望ミシカバ、画工狩野探雪ニユガカシメ、一軸ノ幀トナシテ賜ヒケリ。老師ニ呈シテ、各一句ヲ題センコトヲ請フ。師スナハチ毫ヲ執テ賛ゼラル。

第一牛

白毛一点、信心始生、他日聖解、只尽ニ凡情一。

コレハ、円相ノナカニ、頭上ニ白毛一点アル牛ヲ画キタルヲ賛ゼリ。

第二牛

歓喜頭白、最初発明、未レ得ニ自在一、時惹ニ塵埃一。

コレハ、円相ノナカニ、頭全ク白キ牛ヲ画キタルヲ賛ゼリ。

第三牛

半身半白、何時純一、雖レ登ニ高堂一、猶未レ入レ室。

コレハ、円相ノナカニ、半身白キ牛ヲヱガケルヲ賛ゼリ。

第四牛

人牛無レ跡、杖笠現然、徳山一棒、白日晴天。

コレハ、円相ノナカニ、タヾ杖ト笠トヲノミヱガケルヲ賛ゼリ。

第五牛

太平宇宙、不レ知ニ太平一、円成仏法、難レ語ニ円成一。

コレハ、タヾ一円相ノミヲ図シタルヲ賛ゼリ。

第六牛

命根断尽、始為ニ活人一、雖レ現ニ白体一、旧時精神。

コレハ、円相ノナカニ、純全ノ白牛ヲヱガケルヲ賛ゼリ。

総賛

十方法界、自在分身、塵塵刹刹、転ニ正法論一。

オハリニ前花園雲巌叟讃ト題シ、我ニ授ケテノタマフハ、ヨク這箇ノ牛ヲ牧去レト示サル。

と述べられている。橋染子は柳沢甲斐守吉里の生母であり、正親町大納言公通の娘である。賛を付した将公とは龍興寺三世の雲巌全底であり、図を描いた狩野探雪とは江戸狩野の狩野探幽（名は守信、一六〇二―一六七四）の子である。これによれば、全底の賛の文章が若干は相違するものの、明らかに慧暉の『六牛図』に基づいていることが知られ、この図・賛が現今に残されていれば江戸初期に『六牛図』を描いた貴重な画賛ということになろう。

(33)『続古尊宿語要』巻二「真歇了禅師語」は、真歇清了の雪峰山崇聖禅寺での語録をまとめた『雪峰真歇了禅師一掌録』（現存せず）の抜粋であるが、その上堂に、

巣知レ風穴知レ雨、忽若風雨愆期、又知ニ箇甚麼一。良久云、

却是完全底。

とあり、慧暉の示衆にも通ずるものが見られる。

(34) (9)の上堂では「兼中至」ではなく、「偏中至」を用いたことになっているが、『洞上古轍』巻上「五位答問」では再び「兼中至」に改められている。

(35) 傅大士の「法身頌」とは、『善慧大士録』巻三に「頌二首」として、

空手把二鋤頭一、歩行騎二水牛一、牛従二橋上一過、橋流水不レ流。
有レ物先二天地一、無レ形本寂寥、能為二万象主一、不下遂二四時一凋上。

とある偈頌の一首である。また雲門文偃は『雲門匡真禅師広録』巻中「室中語録」において、この偈頌を引用して、

挙二傅大士頌一云、空手把二鋤頭一、歩行騎二水牛一。師云、是爾従二向北一騎二一頭水牯牛一到二這裏一。乃拈二起拄杖一云、不レ見レ道、千頭万頭到二這裏一、但識二取一頭一。

と述べており、一頭の水牯牛を識取すべきことを強調している。これはすでに述べた慧暉の『六牛図』に連なる発想として注目される。

(36) 妙心寺派の草山祖芳（号は樹下堂・漢興、一七二二―一八〇六）の『樹下堂漫記』巻一七に、

又云、曹山録・自得暉録・真歇劫外録、皆偽作ナリ。百五十年已前ニアノヤウナコトヲシタルモノガアツタ。ケダシ洞家ニ録スクナキユヘニ。其中真歇劫外録ハ群玉韻府〇ノ字ノ下ニ真歇劫外録ヲ引ク、又仏法金湯録ニモ引ク。シカレバ劫外録ト云フモノ、モトハアルト見ヘタリ。シカシ此方ノ流行ノモノハ偽作也。

という記述が見られる。これによれば、玄明従志編『曹山元証大師語録』一巻と潜渓了広編『霊竺浄慈自得禅師録』六巻と義初・徳初編『真州長蘆了和尚劫外録』（『真歇和尚劫外録』とも）一巻を偽作として退けている。ただ、『真州長蘆了和尚劫外録』については限定的に中国での存在を認めているが、『曹山元証大師語録』と『霊竺浄慈自得禅師録』については、曹洞家に中国禅籍が少ないことから後代に作られたものと断定しているわけである。ちなみに椎名宏雄『宋元版禅籍の研究』（大東出版社刊）においても慧暉の語録についてはまったく触れられていない。

(37) 『禅宗頌古聯珠通集』とその続収・増収の部分は「元紹興天衣万寿禅寺沙門普会続集」として元代に魯庵普会（嗣承不詳）が続集したものであり、普会の「禅宗頌古聯珠通集序」には「岩延祐戊午六月旦、前住紹興路天衣万寿禅寺銭唐沙門普会自序」とあることから、延祐五年（一三一八）以前にまとめられたものであることが知られる。ちなみに慧暉の法系に連なる雲外雲岫が「禅宗頌古聯珠通集後序」を題しているのも興味深い。

(38) 中国禅が体質的に持つ本覚思想的発想の問題については、松本史朗『禅思想の批判的研究』（大蔵出版刊）に詳しい。

(39) 史浩（真隠居士）と曹洞禅者との関わりについては、石井修道「史弥遠と禅宗―如浄の五山入院の背景を中心として―」（『宗学研究』第二六号）を参照。

(40) 円爾が将来した宗派図は、泉南（福建省）出身の汝達が集成し、端平元年（一二三四）四月八日（仏成道日）に径山の無準師範が跋を付したものであり、当時の禅宗界の趨勢を如実に反映していることが察せられる。

(41) 法済に関してはほとんどその足跡が定かでない。ただ、他の嗣宗・慧暉・法恭の三人がともに雪竇山に住していることを考慮するならば、あるいは法済も同様であったのかも知れない。ちなみに『扶桑五山記』の雪竇山の項には「中巌」の地名が存しているが、これが法済と関わるのかは不

明である。

(42) 張良臣（字は武子・漢卿）は襄邑（湖北省）の人で四明の地に家を構えている。隆興元年（一一六三）の進士であり、往古の聖人の学問を好み、雪窗先生と称されている。著に『雪窗小集』不分巻が存しているが、『周文忠公集』巻五四に「張良臣雪窗集序」が存し、『攻媿集』巻七〇に「書張武子詩集後」が存することから、大部の『雪窗集』や『張武子詩集』なども存したことが知られる。これらが現存していたならば、張良臣と当時の曹洞禅者（とくに慧暉ら宏智派）との関わりがより具体的に判明していたはずであろう。

(43) 道潛（参寥子）は杭州（浙江省）於潛県の何氏の出身であり、県北一〇里の治平寺に受業し、一に雲門宗の大覚懐璉（一〇〇九―一〇九〇）の法を嗣いだとされ、後に杭州府城の上智果院に住している。内外典に詳しく、また文章に勝れ詩を好み、蘇軾（東坡居士、一〇三六―一一〇一）とも方外の交わりを結んだとされる。妙総大師という勅号を賜わっており、詩集として『参寥子詩集』一二巻が伝えられる。ちなみに道潛の墨蹟としては、『禅林墨蹟』上巻に東京中村富次郎氏蔵の「妙総大師道潛尺牘」が収められ、重要文化財に指定されている。また宮内庁書陵部にも旧東福寺蔵の道潛の宋拓が伝えられる。一方、聖徒とは『仏祖統紀』巻一六に「清修久法師法嗣」として「雪渓晞顔首座」の章が存する聖徒晞顔のことと見られる。顔は字を聖徒といい、自ら雪渓と号したとされ、ほぼ慧暉と同時期に当たっている。四明奉化の人であり、清修法久（？―一一四九）に参じて趙宋天台山家派の南屏派下の教えを受け継いだ後、諸方よりの招請にも固辞して赴かず、桃源の厲氏庵に在って専ら浄土念仏に精進したとされる。

(44) 蔡居士については具体的に誰を指すのか不明である。おそらく宏智正覚の墨蹟とこれに和韻した法恭・慧暉の両者および張良臣の墨蹟（四法師の三印頌）が合綴されて一帖となっていたものを当時、蔡居士が所持しており、これに大観の跋を求めたのであろう。張良臣（雪窓）が他の三者とともに曹洞禅者のごとく扱われているのが興味深い。

(45) 破家が「家を破る」ことであるから、ここにいう破家子とは曹洞宗の家風を打ち破る破天荒な弟子、並み外れた破格な門人といった意味であろう。また宿寃とは昔年の怨恨のことであり、敵のごとく恨みを留める状態をいうが、ここでは転じて師の寃を嗣ぐきわめて勝れた在俗の弟子といった意味と見られる。

(46) 元肇の跋と大観の跋が同一の墨蹟に対するものとすれば、おそらく癡純智穎が書し、さらに元肇が跋文を記した後に、大観も跋文を寄せたものであろう。ちなみに『増集続伝燈録』巻一「四明天童癡純智穎禅師」の章などによれば、智穎は慧暉と交流のあった或庵師体の法嗣であり、晩年に四明の雪竇山や天童山に住していることから、この間に慧暉の法嗣などとも関わり、四者の墨蹟に跋を付する機会が存したのであろう。

(47) ここにいう慧暉の塔とは、あるいは雪竇山の墓塔のことではなく、浄慈寺に建てられた墓塔のことを指しているものと見られ、先の雲外雲岫の偈頌とも合致している。阜陵英主とは南宋の孝宗のことであるから、この祭文によっても慧暉が浄慈寺の住持として孝宗に遇会し、正覚の示した曹洞の絶学を説与したことが知られるわけであり、内容も西湖など杭州の風光が詩われている。

(48) 東谷妙光については、拙稿「南宋末曹洞禅僧列伝(下)」（『駒沢大学仏教学部研究紀要』第五〇号）を参照。

(49) これは明らかに南宋末期の元肇・大観らの跋を受けるものであって、同一の宏智派の墨蹟が元代においても伝播し珍

重がられていた事実が知られるとともに、行端が正覚・慧暉・法恭の曹洞の三師資に寄せる想いが窺われる。

(50) 慧暉の法嗣については、すでに拙稿「南宋末曹洞禅僧列伝(下)」にて考察しておいたわけであるが、さらに諸史料によってこれを補足したものである。

(51) 「瑞巌石牕禅師塔銘」によれば、

受度者四十三人、嗣法者十人。

と記されており、法恭には得度を受けた子飼いの門人（小師）が四三人あり、また嗣法した門人が一〇人ほど存したことが伝えられる。ただし、塔銘では具体的な法嗣の人名としては瑞巌開善寺を継いだ古巌如璧の存在を伝えるにすぎない。

(53) 永井政之「雪竇の語録の成立に関する一考察」（『駒沢大学大学院仏教学研究会年報』第六号）を参照。

(54) 『続伝燈録』以降の燈史には海印空の名はいずれにも載せられておらず、『扶桑五山記』と『明州阿育王山続志』が同じ伝承を受けている点を考察すれば、『明州阿育王山続志』が海印雲の名を海印空と誤写したものと見られる。

(55) 徳雲や慧祚の活動からして、崇堅が仗錫山に住したのは、少なくとも淳熙年間の末か、それ以降のことと推測される。ただ、慧暉の初期の高弟の一人であれば、あるいは慧暉存命中から出世していたのかも知れない。

(56) 『宏智禅師語録』の侍者清萃・法恭編「明州天童山覚和尚真賛下火」に「仗錫為長老写レ真求レ賛」を収めている。

(57) 山濤とは竹林の七賢のひとり晋の山濤（字は巨源、二〇五―二八三）のことで、卓識かつ器量人として晋の武帝に仕えた人である。また孫呉とは春秋時代の兵法家として名高い孫武（孫子）と呉起（呉子）のことあるから、これらの人々に準えられる慧祚とは、きわめて厳格な禅風を振って叢林の榜様とされたのであろう。

(58) 鏡島元隆『天童如浄禅師の研究』では、この偈頌をつぎのように訳している。

僧が明極和尚に参見するのを送る

師尋訪道には、機縁が尽きるところにあらゆる因縁が開かれる。されば、枯木寒岩を守って修行の道を定めてはならぬ。千聖とも手を携えないで独自の道を歩め。月の光は皓皓として明らかでどこに友を借りることがあろう。

(59) 拙稿「虚堂智愚の参学期の動静について(上)」（『曹洞宗研究員研究紀要』第一九号）を参照。

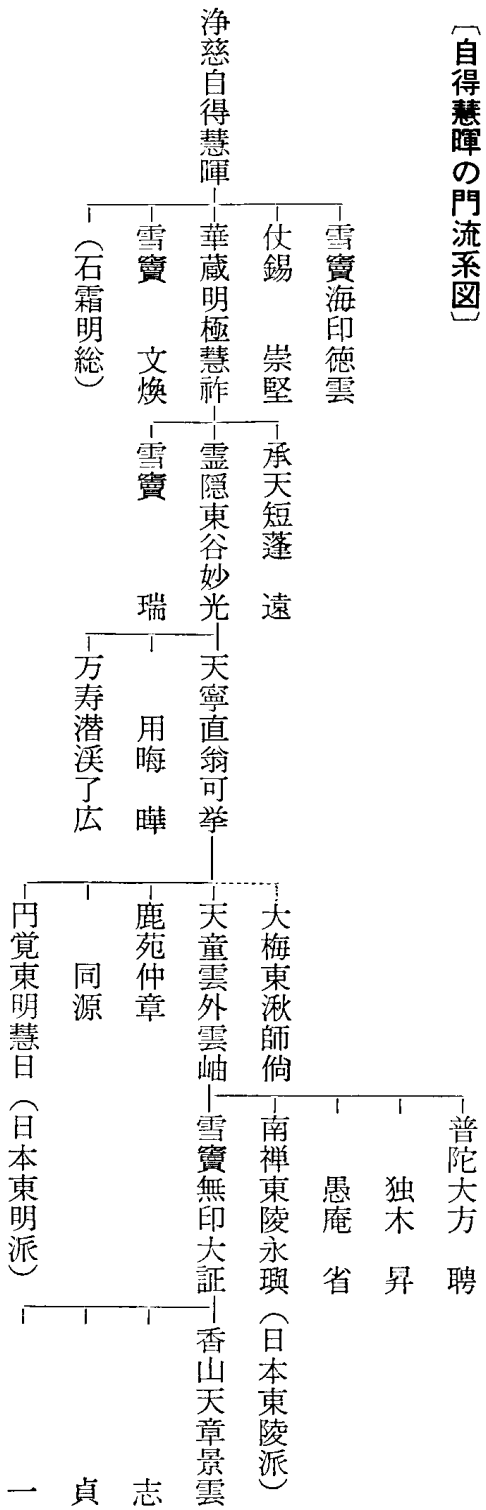
(60) 石霜山については、拙稿「石霜山の変遷とその現況」（駒沢大学中国仏教史蹟参観団編『中国仏蹟見聞記』第五集）を参照。

(61) ちなみに『雪竇寺志略』「祖塔」には、

常通禅師塔・行縁禅師塔・然禅師塔・明覚顕禅師塔〈有レ銘〉・持禅師塔・清簡禅師塔・覚印栄禅師塔〈有レ銘〉・聞禅師塔・聞菴宗禅師塔〈有レ銘〉・自得暉禅師塔〈有レ銘〉・僧彦禅師塔〈有レ銘〉・野翁同禅師塔〈有レ銘〉・善来禅師塔・普同塔。

とあって、住持者一三人の墓塔と他の普同塔の存在を伝えている。とりわけ、「有レ銘」とされる六人の中で、嗣宗と慧暉を除く四人に関しては、『雪竇寺誌』巻六上「塔銘」にそれぞれに実際に「雪竇明覚禅師塔銘」「覚印栄禅師塔銘」「雪林彦禅師塔銘」「野翁同禅師塔銘」としてその全文が伝えられていることから、かつて嗣宗と慧暉の塔銘も存在したであろうことが改めて実感される。

〔自得慧暉の門流系図〕


雪竇海印徳雲
仗錫　崇堅
浄慈自得慧暉
華蔵明極慧祚
承天短蓬　遠
雪竇　文煥
霊隠東谷妙光
雪竇　瑞
（石霜明総）
天寧直翁可挙
万寿潜渓了広
用晦　曄
大梅東湫師倘
天童雲外雲岫
鹿苑仲章
同源
円覚東明慧日（日本東明派）
普陀大方　聘
独木　昇
愚庵　省
南禅東陵永璵（日本東陵派）
雪竇無印大証
香山天章景雲
志
貞
一